

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1990年度

榛原町文化財調査概要 5



1991

榛原町教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1990年度

榛原町文化財調査概要 5

1 9 9 1

榛原町教育委員会

## 序

大和の東方、大和高原の南端を形成する榛原町には、多くの埋蔵文化財が存在しています。1986年度の「榛原町内遺跡詳細分布調査」では、約800遺跡を確認していましたが、本年度では約900遺跡を数えます。この数は、年々、開発行為に伴う発掘調査が増加している結果ともいえるでしょう。

本書は、平成2年度に実施した発掘調査のうち、大貝古墳群の第2次調査概要と沢遺跡の試掘調査概要を『榛原町文化財調査概要5』として刊行するものであります。なお、大貝古墳群の第1次調査の成果は『榛原町文化財調査概要4』として先に刊行していますので、あわせてご参照いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、これらの調査の実施にあたっては、土地所有者の方々をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位のご協力を賜り厚くお礼申しあげます。

平成3年3月

榛原町教育委員会

教育長 山尾正弘

## 例 言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡<sup>うだ</sup>榛原町<sup>はいばら</sup>内に所在する「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要5）である。
- 2 調査は、平成2年度国庫補助事業・県費補助事業として榛原町教育委員会が実施し、平成2年7月1日に着手し、平成3年3月30日に終了した。
- 3 現地調査は奈良県教育委員会の指導のもと榛原町教育委員会技師 柳沢一宏が担当した。
- 4 調査組織および関係者は各本文中に詳しい。
- 5 実測図・写真等の調査記録、出土遺物は、榛原町教育委員会において保管している。
- 6 本書の編集は柳沢が担当した。

# 目 次

I	埋蔵文化財発掘調査の概要	1
II	位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	大貝古墳群第2次発掘調査概要	7
1	調査の契機と経過	7
(1)	調査の契機と経過	7
(2)	現地調査日誌抄	8
2	位置と環境	10
3	遺跡の調査	10
(1)	大貝古墳群の概要	10
(2)	大貝ヲマエヅリ2号墳上面遺構	13
(3)	大貝ヲマエヅリ2号墳	20
4	まとめ	26
	抄 録	27
IV	沢遺跡第3次発掘調査概要	28
1	調査の契機と経過	28
(1)	調査史抄	28
(2)	調査の契機と経過	28
(3)	現地調査日誌抄	29
2	位置と環境	30
3	遺跡の調査	30
4	まとめ	36
	抄 録	38
付 載 1	大貝ヲマエヅリ1号墳・2号墳の石材について	39
付 載 2	大貝ヲマエヅリ1号墳の赤色顔料物質の微量化学分析	44

## I 埋蔵文化財発掘調査の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われており、その件数は年々増加傾向にある。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等について協議を重ねているところである。

当委員会が扱った1990年度（平成2年度）の発掘届・通知、発掘調査等は次のとおりである。これらのうち、本書には大貝古墳群、沢遺跡の各発掘調査概要を収録している。

表1 発掘届・発掘調査件数等一覧表

摘要	年度	1987	1988	1989	1990
発掘調査届（法57-2）		3	2	0	4
発掘調査通知（法57-3）		6	13	6	9
遺跡有無確認踏査願		1	4	3	4
発掘調査（町教委担当）		4	4	3	7
立会調査（町教委担当）		2	3	1	0



写真1 大貝・沢地区全景

表 2 1990年度発掘調査地一覧表

番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因	調査概要		備考
					遺構	遺物	
1	うちまき 内牧カラト遺跡	榛原町内牧	1990・6・12～1990・7・17	林道開設 (榛原町)	土坑	凹石	榛原町文化財調査報告 第6集
2	おほい 大員古墳群	榛原町大員	1990・7・7・26～1991・3・20	農地造成 (個人)	土坑、古墳周溝ほか	土師器、瓦器、 陶磁器、鉄釘ほか	本報告
3	しらい 下井足カワタ遺跡	榛原町下井足	1990・8・8～1990・8・22	道路開設 (榛原町)	溝、 竪穴式住居跡?	サスカイト、 須恵器、土師器ほか	1991年度本調査予定
4	ささげ 篠菜遺跡群	榛原町篠菜	1990・11・1～1990・11・28	ゴルフ練習場 (トローブ企画)	自然流路、ピット、 火葬施設、土坑、 溝	石鏃、サスカイト、 弥生土器、須恵器、 土師器、瓦器、 臼玉ほか	1991年度報告書刊行予定
5	あかほろ 赤壇上依遺跡	榛原町赤壇乙	1990・11・27～1991・1・23	農地造成 (榛原町)	土坑、ピット	石鏃、サスカイト、 須恵器、土師器、 瓦器	
6	あかざ 赤瀬遺跡	榛原町赤瀬	1990・12・17～1991・1・7	農地造成 (榛原町)	遺物包含層	石鏃、サスカイト、 須恵器、土師器ほか	榛原町文化財調査概要6
7	さわ 沢遺跡	榛原町沢	1991・2・14～1991・2・27	個人住宅 (個人)	ピット	須恵器、土師器、 瓦器、陶磁器ほか	本報告

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

大和盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と総称されている。口宇陀は標高約300～400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称されている。大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がこの口宇陀に含まれている。

榛原町を流れる主要河川は、芳野川、内牧川などがあり、これらは谷部を蛇行しながら他の小支流をあわせ、さらに広い宇陀川となる。その後、宇陀川は北東へと流れ、三重県へ至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へとそそいでいる。口宇陀の西には龍門山地が横たわり、これが大和盆地との分水界となっているため、大和川流域とは水系を異にしている。

今回、発掘調査を実施した大貝古墳群、沢遺跡はともに榛原町の高峰の一つである伊那佐山（標高637m）の南方の裾野に位置しており、榛原町の市街地からは、南へ約7kmの距離を測る。

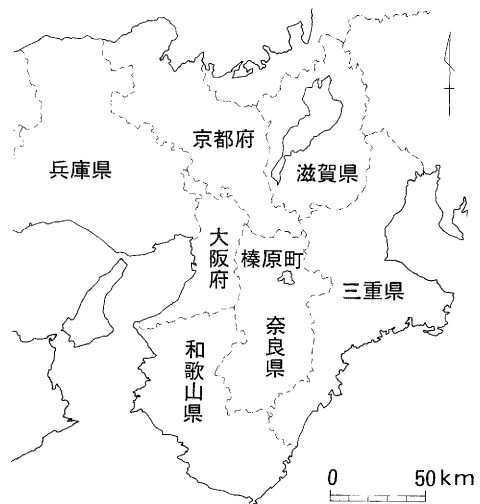


図1 榛原町位置図

### 2 歴史的環境

楯並めて 伊那佐の山の 樹の間よも い行きまらひ

戦えば 吾はや飢ぬ 鳥つ鳥 鶺鴒が伴 今助けに来ぬ

(『古事記』 中つ巻)

神武天皇が東征の際、吉野、宇陀を経て橿原へと至ったことは、よく知られているところである。このルートは古くから開かれていたことが考えられ、神武天皇が歌った「伊那佐山」周辺も古くから重要な位置を占めていたことが予想できる。このほか、宇陀地方は『古事記』、『日本書紀』に度々登場し、軍事・交通の要衝であったことが窺い知ることができ、今に残る地名も多い。

榛原町を流れる宇陀川・<sup>ほうの</sup>芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、なかでも伊那佐山を取り巻くように流れる芳野川流域は、その密集地となっている。

縄文時代の遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。



また、弥生時代の遺跡は後期に属するものがほとんどであるが、地理的な制約のためか、奈良盆地で見られるような大規模な集落は認められない。伊那佐山周辺では、縄文時代後期から弥生時代後期の沢遺跡、縄文時代晩期から弥生時代前期の下城・馬場遺跡、弥生時代中期から後期の大貝ヒジキ山遺跡、池上所在遺跡、後期の高塚遺跡や三角遺跡など確認されており、これらのほとんどは、次代の古墳時代へと続いている。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である方形台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、谷遺跡、能峠中島遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や竪穴式住居跡などが確認されている。

前期古墳としては谷畑古墳、中期古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳などが発掘調査により明らかにされている。後期となると古墳の数は著しく増加し、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半から形成される古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷トノヤシキ古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって各所に横穴式石室群が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群などが発掘調査により明らかになっている。

横穴式石室に代わる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものは、壬申の乱で活躍した将軍のひとりで、渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墓誌などの出土品は国宝、墳墓は史跡となっている。

古代末には宇陀においても荘園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社の支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏、沢氏、芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。下城・馬場遺跡は沢氏の居館跡との伝承が残っており、1984年の発掘調査において井戸、土坑等を確認している。栗谷トノヤシキ城館跡や上井足殿垣内城の廃絶後、これらの上にはいわゆる中世墓地が営まれている。これらのほか、周辺では大貝ヒジキ山遺跡、野山遺跡群、八咫烏遺跡群、能峠遺跡群、大王山遺跡などでまとまった墳墓が確認されている。

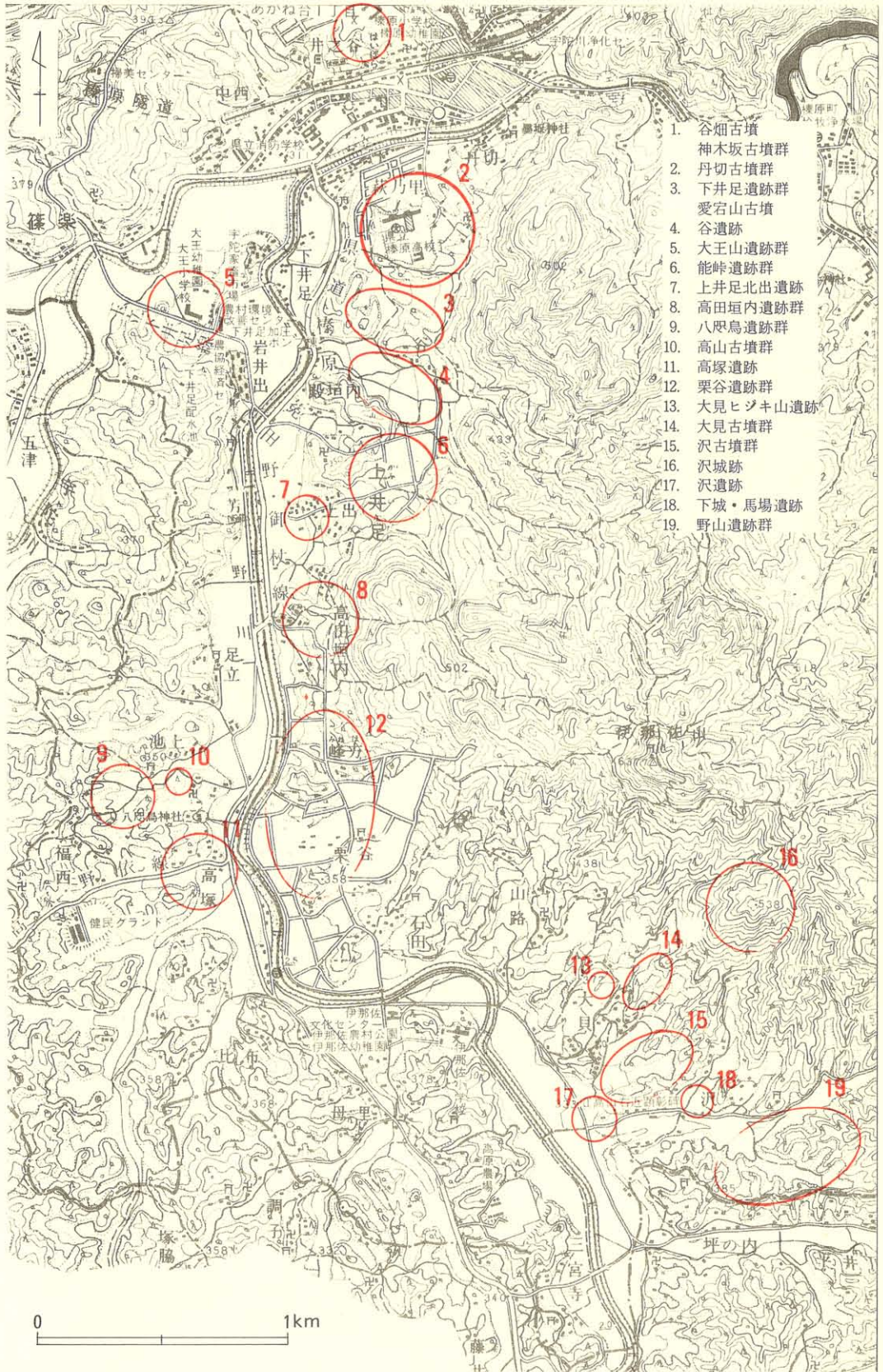


図2 周辺遺跡分布図

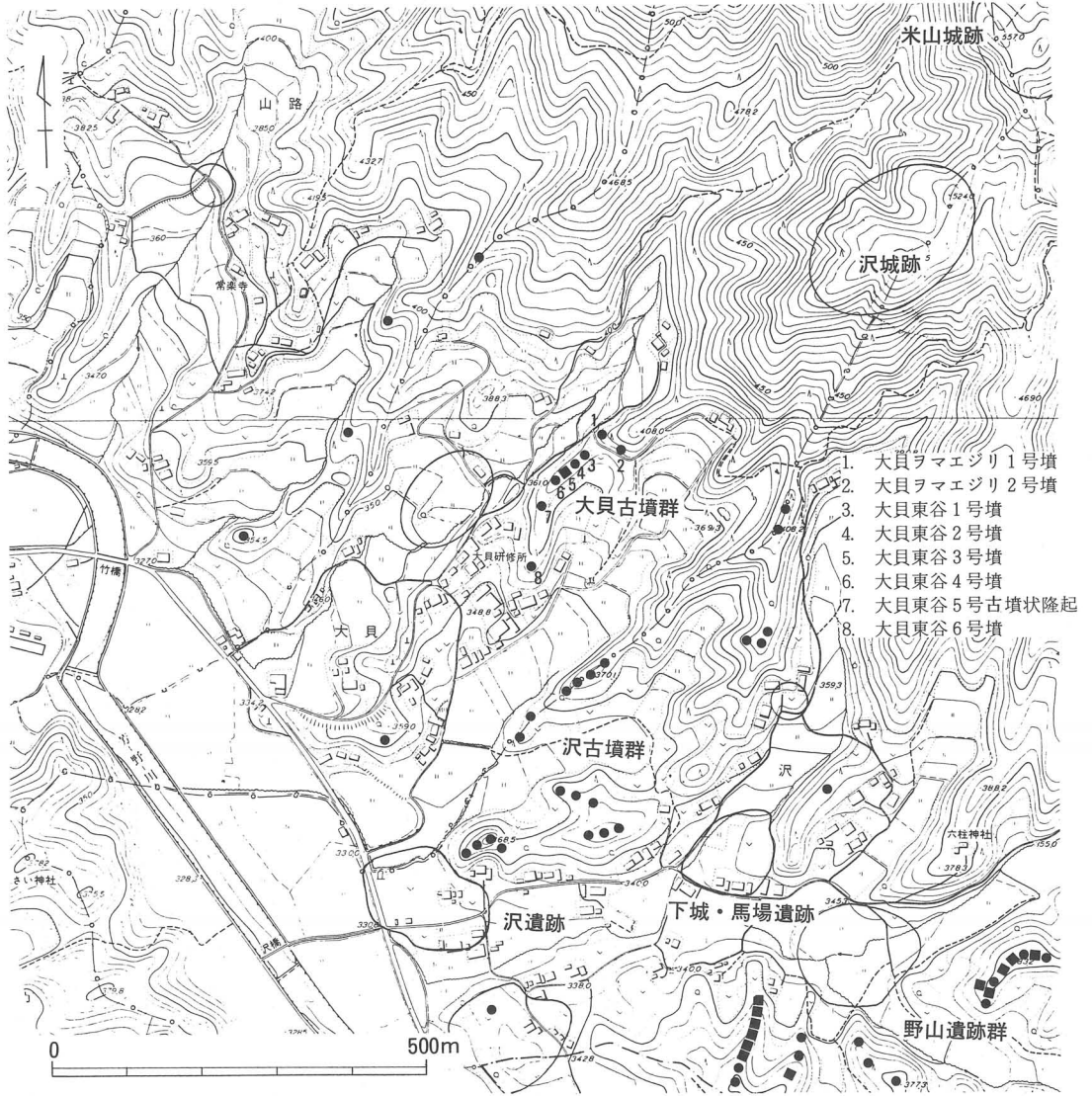


図3 大貝古墳群・沢遺跡周辺地形図

### Ⅲ 大貝古墳群第2次発掘調査概要

#### 1 調査の契機と経過

##### (1) 調査の契機と経過

今回の発掘調査は、1989年度に実施した「大貝古墳群発掘調査」の継続調査であり、1989年度の調査を第1次調査、1990年度の調査を第2次調査とする、事前協議から第1次調査終了に至る経過は、次のとおりである。

1987年10月	土地所有者から埋蔵文化財有無の照会、発掘調査が必要な旨を回答
1988年9月9日	土地所有者から埋蔵文化財発掘届出書の提出。以後、関係機関・関係者等が事前協議
1989年9月1日	平成元年度国庫補助事業・県費補助事業として榛原町教育委員会が発掘調査を実施
1989年10月23日	現地調査開始
1990年3月19日	現地調査終了
1990年3月31日	発掘調査事業終了、大貝ヲマエヅリ2号墳および中近世遺構の範囲は、さらに東方の畑地へと続くことが明かとなったが、農作物や構造物等の関係上、平坦面全体を発掘調査することができなかったため、翌年度に東半部分の発掘調査を実施することとなった。

第2次調査は、予備調査を経たのち、1990年7月26日に着手し、1991年3月20日に終了したが、他遺跡の発掘調査日程の関係上、断続的なものとなっている。発掘調査と並行して遺構の保存等について協議を重ねた結果、土地所有者の協力により大貝ヲマエヅリ2号墳の横穴式石室は、現状保存できることとなったため、埋め戻し作業も併せて行っている。また、大貝古墳群の全容を把握し、古墳群保存の基礎資料とするため、東谷支群の墳丘測量調査も実施している。これらの経過・結果については次頁以降に詳しく述べているが、記述の都合上、一部に第1次調査成果を引用している。なお、調査関係者は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会
調査担当課	榛原町教育委員会 社会教育課
調査担当者	榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳沢一宏
調査補助員	井上好美、杉本淳子、山本文子、森塚和彦、田中正樹、山本正和、山本美恵子
調査作業員	山口 実、山口基嵯子、山本清子、山本恵子、松本貞子、太田政信、坂本貞子
調査指導	奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所
航空写真撮影	株式会社パスコ
調査協力	大貝自治会、安田博幸、奥田 尚、山口 武、山本喜清、森岡 豊、大門茂右衛門

## (2) 現地調査日誌抄

1990年(平成2年)

7月26日(木)

調査予定地内の草刈作業。

7月27日(金)

調査測量用杭確認・設置作業。

7月31日(火)

器材搬入。作業打ち合せ。

8月1日(水)

調査地内の野小屋撤去作業。調査前の写真撮影。掘り下げ開始。

8月2日(木)

第1～2層の掘り下げ作業。

8月3日(金)

掘り下げ作業。中世の遺構検出面まで下げるが、地面の乾燥が著しく詳細は不明。

8月6日(月)

散水を重ねながらの遺構検出作業。土坑203の掘り下げ作業。

8月7日(火)

遺構検出作業。2号墳の周溝埋土と考えられる黒褐色粘質土の広がりを確認。

8月8日(火)

遺構検出作業。

8月9日(木)

遺構検出作業。土坑群の掘り下げ作業。午後、降雨のため作業中止。

8月10日(金)

黒褐色粘質土の深さを確認するため、サブトレンチを設定。

8月17日(金)

黒褐色粘質土の広がりをほぼ確認。

8月18日(土)

遺構検出作業。

8月20日(月)

中世整地土を掘り下げ黒褐色粘質土検出作業。

8月21日(火)

調査範囲を拡張することとし、表土掘り下げ作業。

8月23日(木)

中世遺構面・土坑・土層断面・黒褐色粘質土の範囲の写真撮影。

8月24日(金)

中世遺構の実測作業。調査地の平板測量。

8月27日(月)

中世遺構の実測作業。

8月28日(火)

黒褐色粘質土の掘り下げ作業。土坑群の写真撮影。

8月29日(水)

黒褐色粘質土の掘り下げ作業。土坑群の実測作業

8月30日(木)

黒褐色粘質土の掘り下げ作業。

8月31日(金)

黒褐色粘質土の掘り下げ作業。周溝内で小土坑群を検出。

9月3日(月)

中世整地土の掘り上げ作業。



写真2 作業風景



写真3 作業風景

9月4日(火)～9月6日(木)  
中世整地土・黒褐色粘質土の掘り下げ作業。

9月7日(金)  
土層断面写真撮影・実測図作成。周溝内の小土坑群掘り下げ作業。

9月10日(月)  
周溝底の小土坑群掘り下げ作業。

9月11日(火)  
2号墳東半土層断面確認作業。

9月12日(水)  
周溝内の小土坑群実測作業。

9月13日(木)  
周溝内の小土坑群実測作業。東西土層断面実測図作成。

9月20日(木)  
9月14日～9月19日の大雨のため調査地内の各所が崩壊し、復旧作業。

9月21日(金)  
調査地内の平板測量。

9月27日(木)  
土層断面図の補筆・訂正作業。

9月28日(金)  
土坑実測作業。

11月21日(水)  
器材撤収。調査地全景の写真撮影。

11月23日(金)  
航空写真撮影。

1991年(平成3年)

2月18日(月)～2月20日(水)  
2号墳埋め戻し作業。

2月21日(木)～2月26日(火)  
大貝古墳群草刈り作業。

2月22日(金)～3月20日(水)  
この間、断続的に平板測量調査。写真撮影。

## 2 位置と環境 (図2・3)

大貝古墳群は、榛原町の高峰のひとつである伊那佐山から南方へ派生する標高370~400mの一尾根上に位置する。眼下には芳野川、南方は吉野地方の山々、秋山城跡、西は宇陀と桜井との境界でもある音羽山の山系、背後には中世山城である沢城跡を望むことができる。周辺には、大貝ヒジキ山遺跡(弥生時代中期~古墳時代後期・中世)、沢遺跡(縄文時代中期~中世)、下城・馬場遺跡(縄文時代~中世)、野山遺跡群(弥生時代後期~近世)をはじめ多くの遺跡が確認されている。

## 3 遺跡の調査

### (1) 大貝古墳群の概要

榛原町大字大貝の尾根上には、古くから古墳の存在が知られ、1892年(明治25年)起の『古墳墓調書 但宇陀郡ノ部』には4基の古墳(図4)、1893年(明治26年)の『大和國古墳墓取調書』には6基の古墳の見取り図、横穴式石室等の略図が記載されている。1971年(昭和46年)の『奈良県遺跡地図(第2分冊)』では、4基の古墳群として登載され、1986年(昭和61年)の町内遺跡詳細分布調査では5基の古墳と1基の古墳状隆起を確認している。その後、1989年の発掘調査・分布調査では新たに2基の古墳を確認し、8基の古墳・古墳状隆起で構成されていることが明らかとなっている。



古墳群の名称は、地元の大字名をとって大貝古墳群と呼称し、発掘調査を実施した古墳は小字名をとって大貝ヲマエヅリ1号墳・2号墳(以上、大貝ヲマエヅリ支群)としている。なお、未調査の古墳は、小字名をとって北方から順次、大貝東谷<sup>ひがし</sup>1号墳・2号墳・3号墳・4号墳・5号古墳状隆起・6号墳(以上、大貝東谷支群)と呼称することとする。

図4 『古墳墓調書 但宇陀郡ノ部』の大貝古墳群

#### 大貝ヲマエヅリ 1号墳（別添図、写真4・5）

1989年度に発掘調査を実施し、直径16m、高さ3.5mの円墳であることが明らかとなっている。埋葬施設は西に開口する横穴式石室であるが、その大半の石材が持ち出されている。石室内からは須恵器、土師器、鉄釘、鉄刀子、鉄鏃、金環、銅環等が出土している。6世紀後葉に築造され、6世紀末葉～7世紀初頭に追葬されている。

#### 大貝ヲマエヅリ 2号墳（図14、別添図、図版4）

1989年度に西半部、今年度に東半部の発掘調査を実施している。尾根の斜面に築造されているため、直径約13m、高さ約4mの半円状に墳丘をつくっている。埋葬施設は南西に開口する横穴式石室であるが、羨道部の詳細は明らかでない。石室内からは須恵器、黒色土器、土師器等が出土している。7世紀前葉に築造され、9世紀後半以降、石室の再利用が行われている。追葬の有無は明らかにできなかった。

#### 大貝東谷 1号墳（図版14、別添図）

東谷支群の北端に位置する径14m、高さ1～3mの円墳である。墳丘を横断するかのよう東西方向の浅い窪み（盗掘坑）が認められ、西に開口する横穴式石室が埋没している可能性が考えられる。墳丘はある程度の地山成形ののち、盛土を施していると思われる。

#### 大貝東谷 2号墳（図版14・15、別添図）

径22～24m、高さ2.5m～6mの円墳で、地形的制約のため北から西方向にかけての見かけ上の高さがある。明治時代には玄室の天井石1石が取り除かれた横穴式石室が記録されているが、現在は墳丘中央部から南西方向にかけて大きな盗掘坑が穿たれ、この時の土砂はその前に掻き出された格好となっている。南西に開口する横穴式石室は大貝ヲマエヅリ 1号墳と同じ頃、採石・盗掘の禍にあっていると考えられる。

#### 大貝東谷 3号墳（図版15、別添図）

従来、円墳と考えてきた古墳であるが、測量・地形観察の結果、方墳であることが明らかとなった。墳丘の南西側は採土、南東側は道のため破壊され、詳細は明らかではないが、一辺14～15m、高さ2～3.5mの規模を測る。崖面の土層断面観察から墳丘の約3/4が地山整形によっている。墳丘上には盗掘坑は認められず、埋葬施設は木棺直葬とも考えられる。

#### 大貝東谷 4号墳（図版16、別添図）

古墳周辺は大きく改変され、北から西にかけて墳丘裾部が認められるにすぎない。古墳は径18～19m、高さ4～5mの円墳に復元できる。墳頂部の南東には浅い盗掘坑、南西には横穴式石室が開口する盗掘坑が認められ、前者は奥壁付近にまで到達していたようである。横穴式石室は南西方向に開口し、現存長3.8mを測る。明治時代と同様、この中には入ることができないが、開口部分は羨道部にほど近い玄室部分と推定され、石材は比較的小さなものをやや乱雑気味に積み上げている。盗掘坑の輪郭及び石室の確認規模からこの全長は8m程度と考えられる。



大貝東谷 5 号古墳状隆起 (図版17、別添図)

北側の墳丘部分が明瞭でないため、古墳状隆起としている。円形を呈し、径約 8 m、高さ約 1 m を測る。中央部から南東方向にかけて盗掘坑が認められるが、石材等は確認できない。

大貝東谷 6 号墳 (図版17、別添図)

5 号墳から尾根筋を約 50 m 下った尾根先端部分に単独に位置する。墳丘裾部は明瞭となっており、径 18 m、高さ 1 ~ 3 m を測る円墳である。また、古墳北側の背後には幅約 4 m、延長約 12 m の掘り割りが認められる。墳頂部は比較的平坦となっており、その頂部径は 7 ~ 9 m を測り、この中央には浅い窪みが認められる。埋葬施設については明らかでないが、木棺直葬の可能性が高い。

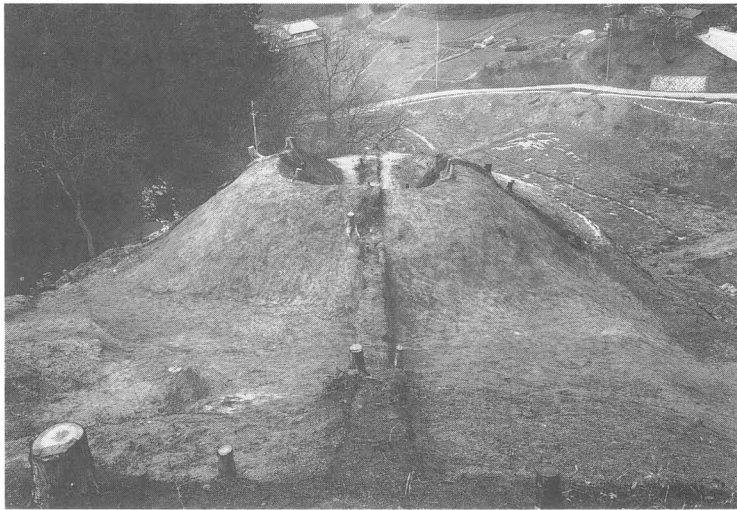


写真4 大貝ヲマエジリ1号墳



写真5 大貝ヲマエジリ1号墳横穴式石室

## (2) 大貝ヲマエジリ2号墳上面遺構

大貝ヲマエジリ2号墳の上面にはこの古墳を削平し、南北11m以上、東西25m以上の平坦面が形成されている。以下、この平坦面にともなう遺構・遺物について述べる(図6、図版6)。

### 遺 構

土坑201(図7、図版7)

第1次調査時に検出したものであるが、上面遺構としてあわせて捉えておく。2号墳盗掘の際、土坑の南から東にかけてその一部が削られているが、径1.8m、最大深約0.6mの円形土坑である。断面形態は碗状を呈し、その底は丸味を帯びている。灰黄色粘質土の埋土中からは遺物の出土は認められない。

土坑202(図8、写真6、図版7)

第1次調査時に一部を検出し、今回、その全容を明らかにし得た。径1.2~1.35m、最大深0.55m

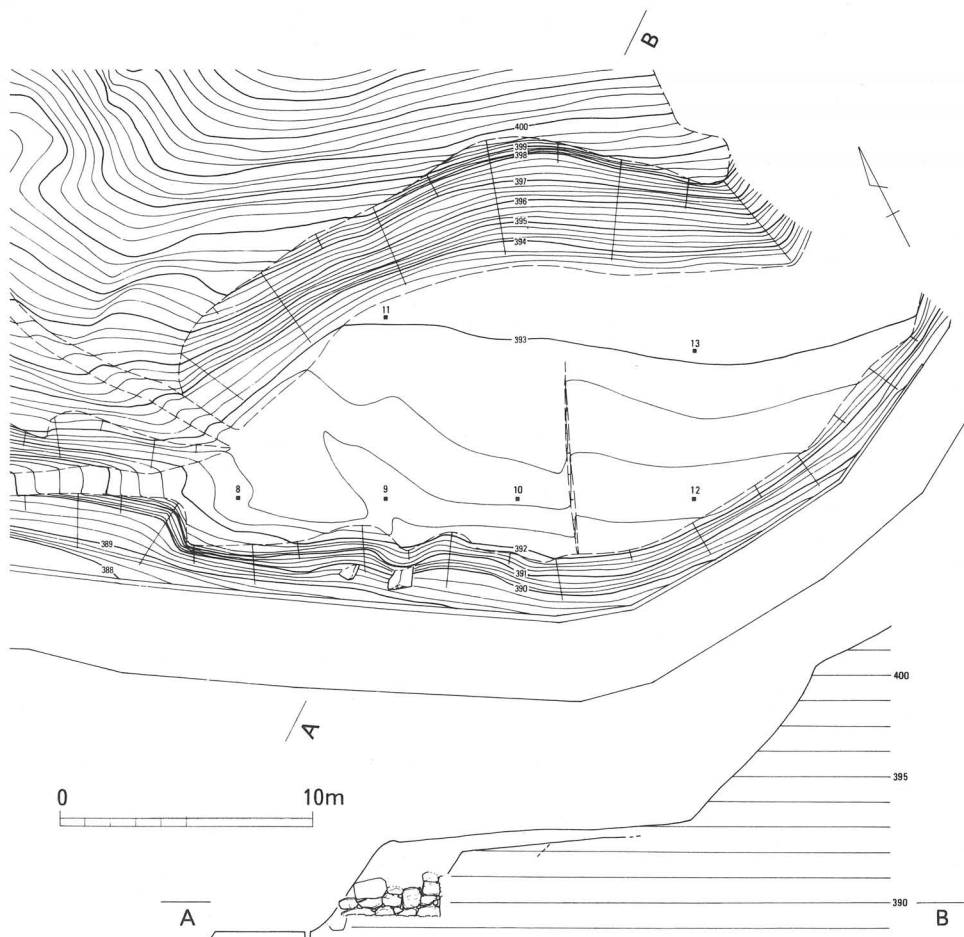


図5 大貝ヲマエジリ2号墳測量図(調査前)

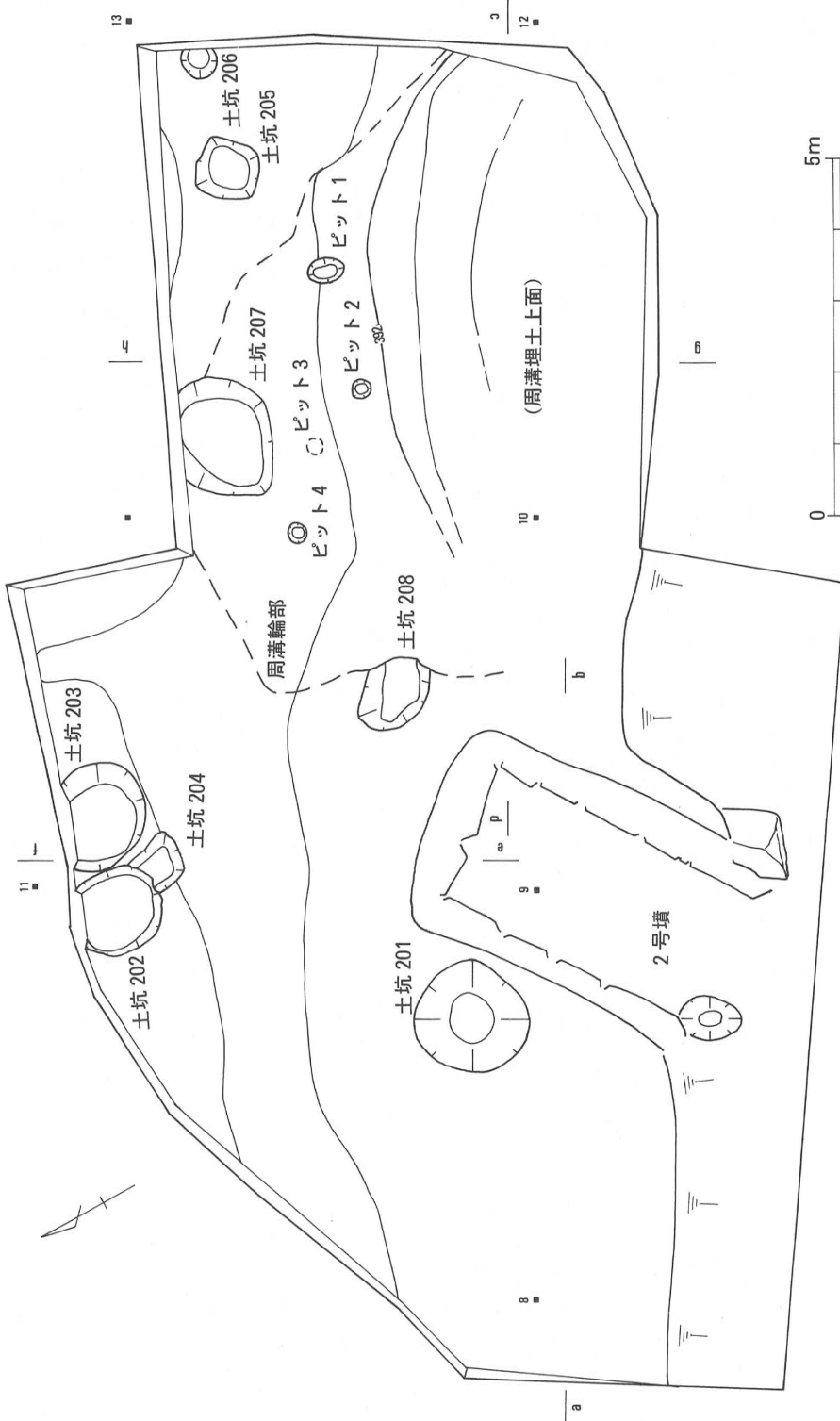


図6 大貝マリエジリ2号墳上面遺構測量図

を測る円形土坑で、底は平坦となっている。埋土下層は黒色粘質土、灰茶色粘質土の汚泥状を呈し、排水等が貯まっていたとも考えられる。遺物の出土は認められない。

土坑203（図8、写真7、図版7）

土坑202の東隣に位置する円形土坑である。その規模は径1.35～1.5m、最大深0.52mを測り、規模、形態とも土坑202と類似する。その埋土は茶色系の砂質土（上層）、やや粘質の灰色土（下層）となっており、土坑202と同様、水が貯まっていたと考えられる。ここからは、土師器、陶器、鉄

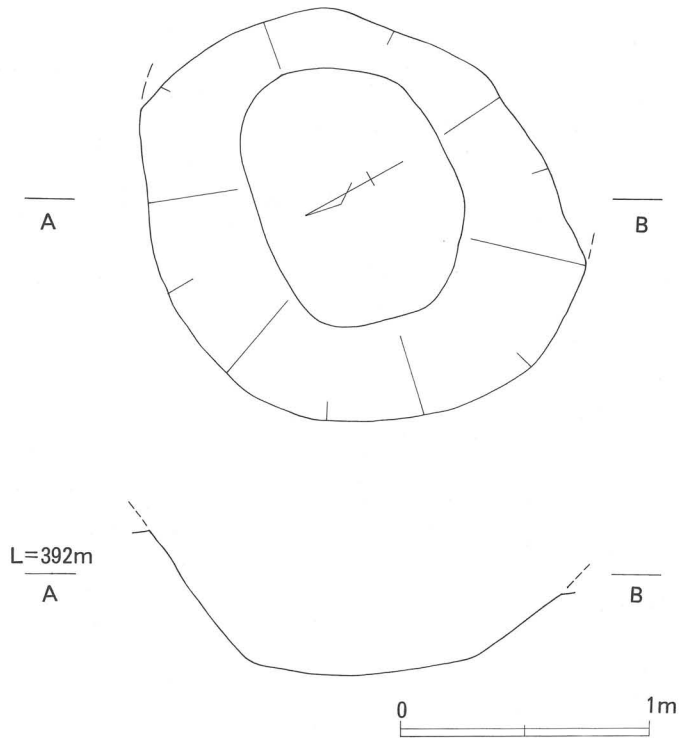


図7 土坑201実測図

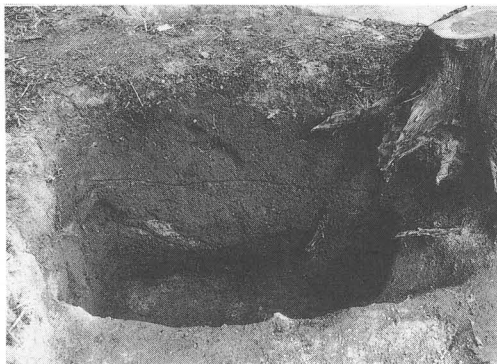


写真6 土坑202土層断面



写真7 土坑203土層断面

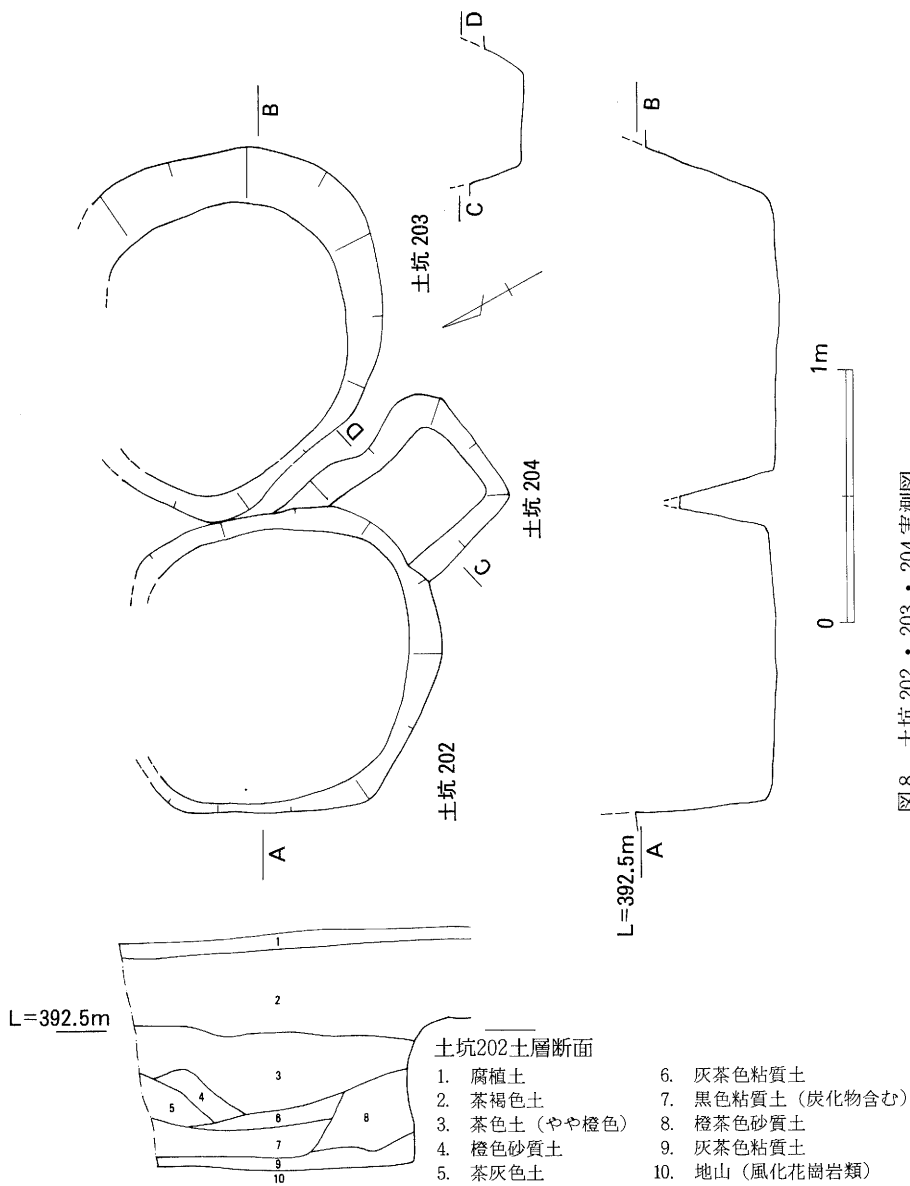


図8 土坑202・203・204実測図

釘の各破片が出土しているが細片のため図示し得ない。

土坑204 (図8、図版7)

土坑202にその北端が切られた格好となっている方形土坑である。その規模は南北長0.8m以上、東西幅0.55~0.6m、最大深0.27mを測り、底は平坦となっている。遺物の出土は認められない。土坑202に伴うものかどうかは明らかにできない。

土坑205 (図9、図版8)

耕作土下で遺構面を検出しているため、この土坑周辺は、耕作痕が著しい。隅丸円形状の円形土坑で、その規模は径0.9m、最大深0.24mをはかる。淡茶色の埋土中からは、瓦器椀、土師器土釜、陶器椀の各破片が出土しており、このうち土師器土釜の実測図を図13に掲載している。

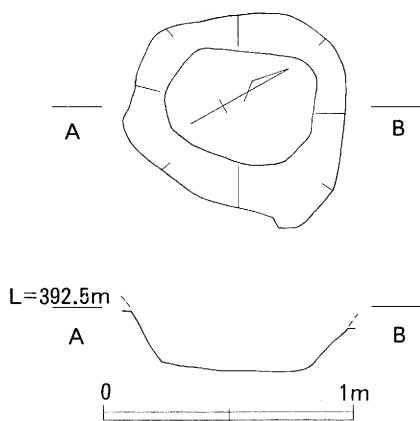


図9 土坑 205 実測図

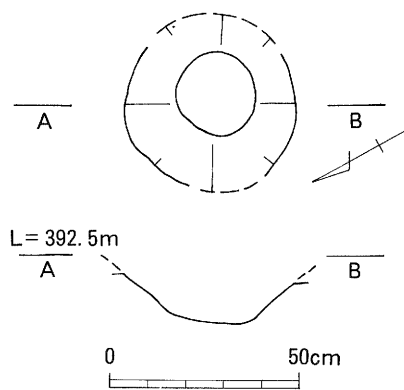


図10 土坑 206 実測図

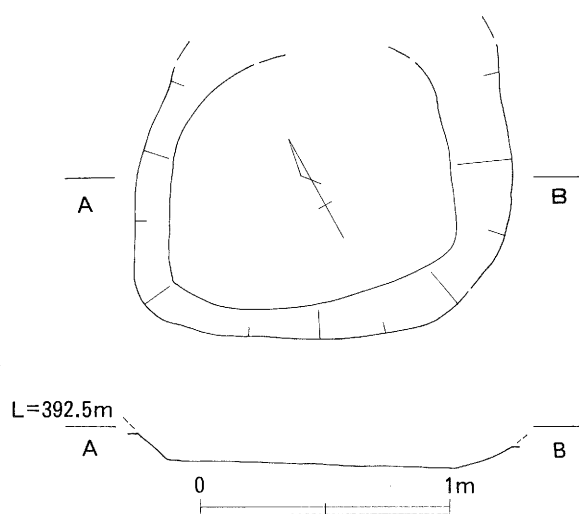


図11 土坑 207 実測図

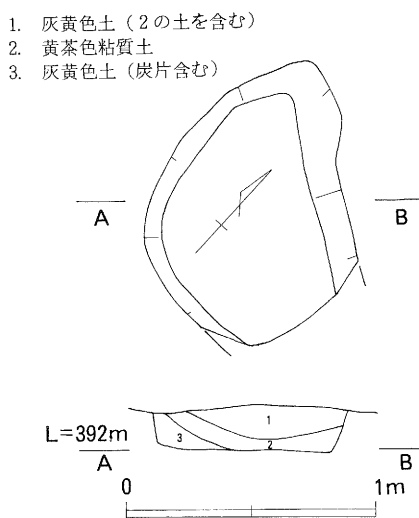


図12 土坑 208 実測図



写真8 土坑208土層断面

比高差は約4cmである。淡黄茶色砂質土の埋土中からは、遺物は検出していない。

土坑208 (図12、写真8、図版9)

この土坑は、2号墳の周溝掘り下げ作業中に検出したため、この東端を不注意にも削り込んでいる。平面形態は、いびつな隋円形を呈し、長径0.9m以上、短径0.82m、最大深0.15mを測る。埋土は3層に大別でき、上から順に灰黄色土、黄茶色粘質土、炭片を含む灰黄色土となっている。遺物の出土は認められない。

ピット群 (図6、図版6)

土坑205から土坑207の南方に4基のピットが点在するが、現状での規則性は認められない。ピット1の底では径15cm前後の炭化物や小石材を検出している。土師器皿や陶器碗の破片も出土しているが、細片のため図示できない。ピット3・4でも前者と同様の小石材を検出している。

遺物 (図13)

2号墳上面の平坦面からは、コンテナ整理箱にして3箱の瓦器、土師器、陶磁器等の遺物が出土しているが、細片が多く、ここに図示したものは僅かである。

瓦器 碗 (1)

復元口径16cm、現存高4.1cmを測り、口縁端部には沈線を施す。内面にはヨコ方面の暗文、同底部には連結輪状暗文が認められる。高台は現存していないが、張り付け高台と考えられる。整地土内からの出土である。

土師器 皿 (2)

復元口径11cm、器高1.9cmを測る明褐色系の皿である。口縁部は外上方に立ち上がり、この端部は外方へやや屈曲している。口縁端部内面には黒色を呈するヤニ状のものが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。整地土内からの出土である。

土師器 焙烙 (3~5)

比較的多くの焙烙片が出土しているが、これらのうち3点を掲載した。これらは復元口径32.8~34.4cmを測り、外面には煤の付着が認められる。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり、端部は外方

土坑206 (図10、図版8)

土坑205の東隣に位置する円形土坑である。径0.45m、最大深0.13mをはかり、埋土は黄灰色土である。土坑内は全面に焼けている。土坑内から遺物は出土していない。

土坑207 (図11、図版9)

東西径1.5m、南北径1.2m以上、最大深0.12mを測る楕円形土坑で、窪み状を呈する。ほぼ平坦な底は西から東へと徐々に低くなっており、その

に開く。この口縁端部と体部との間には断面形態が三角形を呈する稜が認められる。調査地各所の第2層からの出土である。

土師器 土釜 (図13-6)

口径が復元できないため、この断面形態のみを掲載している。口縁部は内傾し一条の稜が認められる。鋸部は短く、その断面形態は三角形を呈する。土坑205から出土した遺物のひとつである。

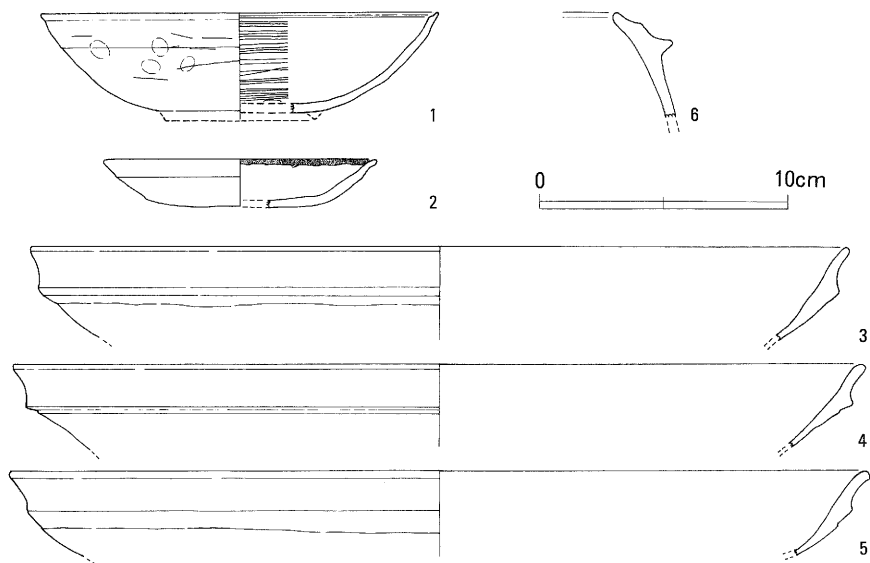


図13 大貝ヲマエジリ 2号墳上面出土遺物実測図



### (3) 大貝ヲマエジリ2号墳

#### 位置と現状 (図5、図版5)

先述のとおり古墳は削平され、平坦面となっている。また、南半は道路により破壊されている。この詳細は「榛原町文化財調査概要4」を参照されたい。

#### 墳丘と周溝 (図14~17、写真9・10、図版10~13)

中世の整地土 (図15-14~22・図16-13~23の土層) を取り除くと上半が削平された墳丘や周溝埋土 (図16-24~28の土層) を検出している。なお、図6の上面遺構測量図のうち、東半部が整地土下の周溝埋土を検出した状況を示している。

石室構築にあたっては、まず、風化花崗岩類の地山を南北長15m以上、東西幅35m以上の規模で、いびつな半円状に穿っている。この掘り込み作業ののち、西方から北方にかけてさらに地山を穿ち墓壙を形成している。一方、古墳東半には、掘り込み作業坑底より全て盛土によっており、この底を穿った痕跡は認められない。石室石材の積み上げと盛土とを繰り返して行っていると考えられ、盛土は砂質土と粘質土とを交互に盛っている。

周溝東半は先の掘り込み作業坑、西半は2号墳墳丘盛土によって形成されており、底は北から南方へと下っている。周溝北半では幅6~7m、深さ0.3~0.7mを測る。埋土は上層の淡黒褐色粘質土、中層の黒褐色粘質土・淡黒褐色粘質土、下層の暗黄褐色粘質土となっている。なお、上層からは瓦器、土師器の細片が出土している。周溝底には径20~50cm、深さ20~50cmのピット24基が認められ、これらの埋土は周溝のものと類似した暗黄褐色粘質土、黒褐色粘質土である。

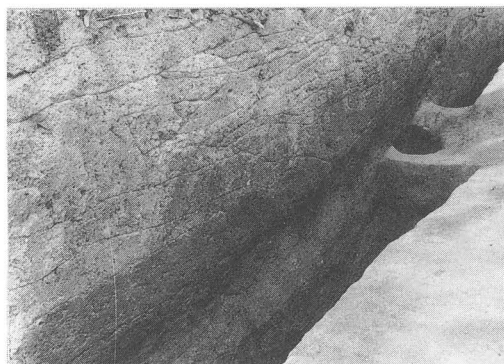


写真9 大貝ヲマエジリ2号墳東西土層断面(1)



写真10 大貝ヲマエジリ2号墳東西土層断面(2)

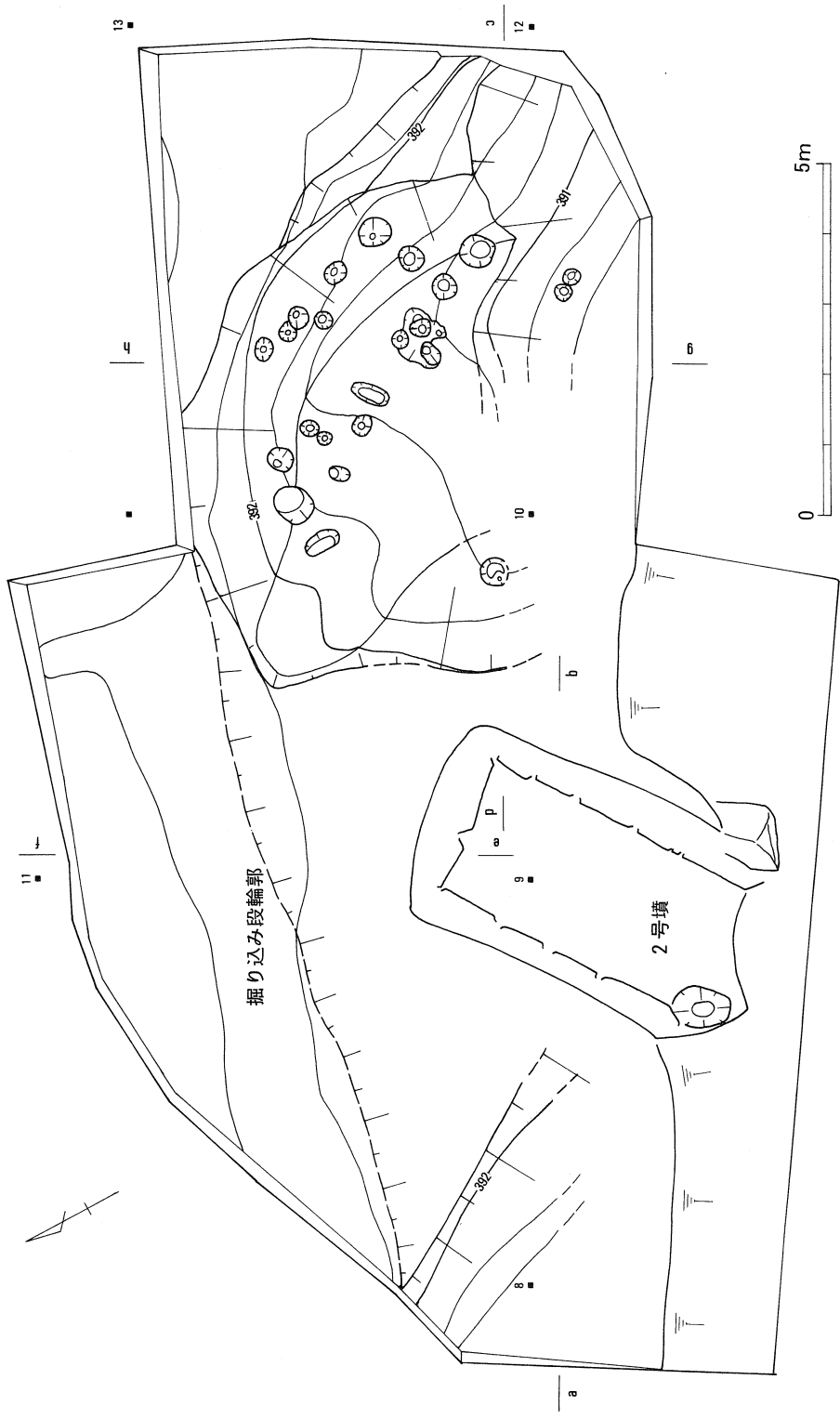


図14 大貝ヲマエヅリ2号墳測量図(調査後)

東西土層断面 (西半)

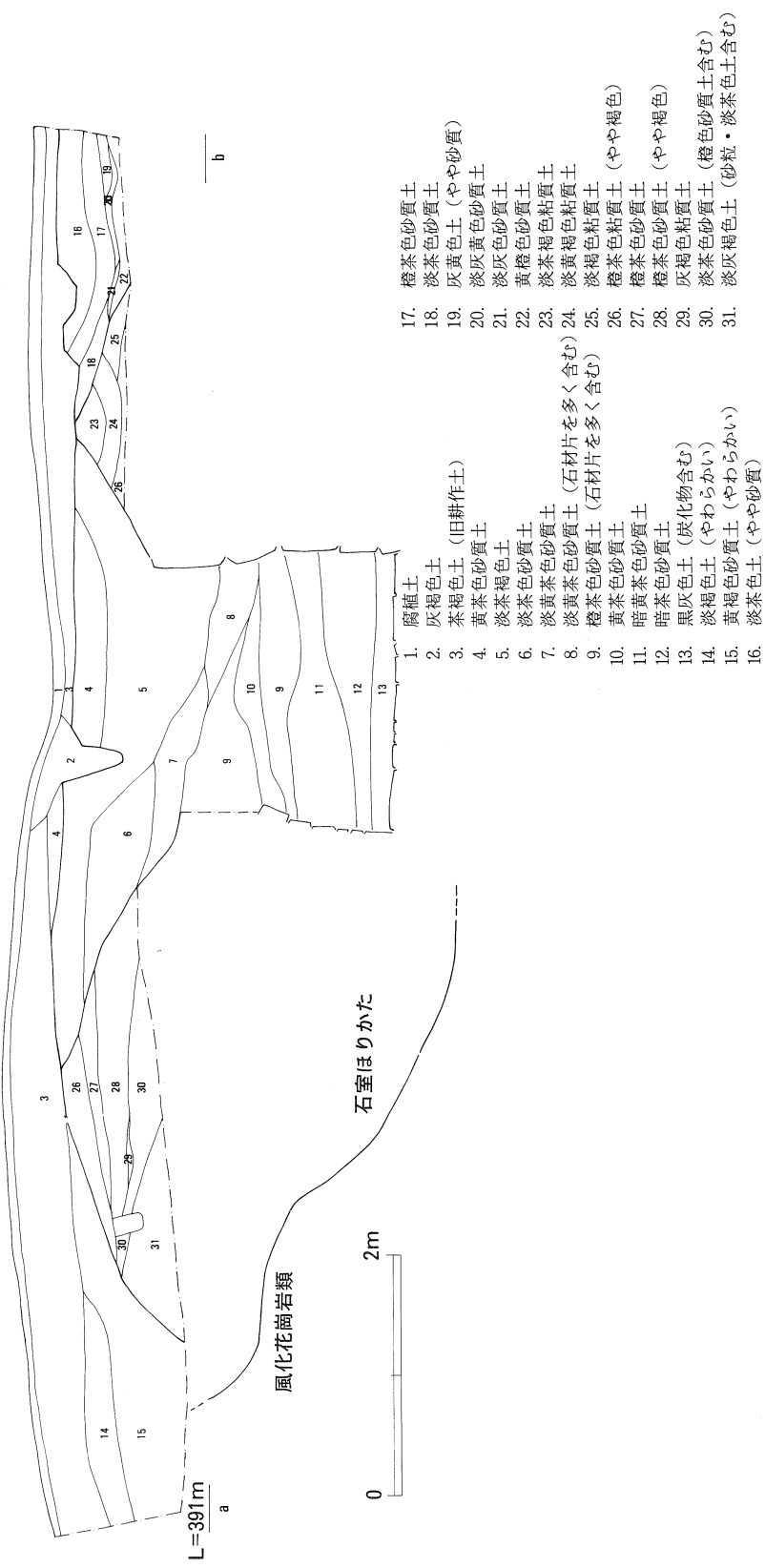
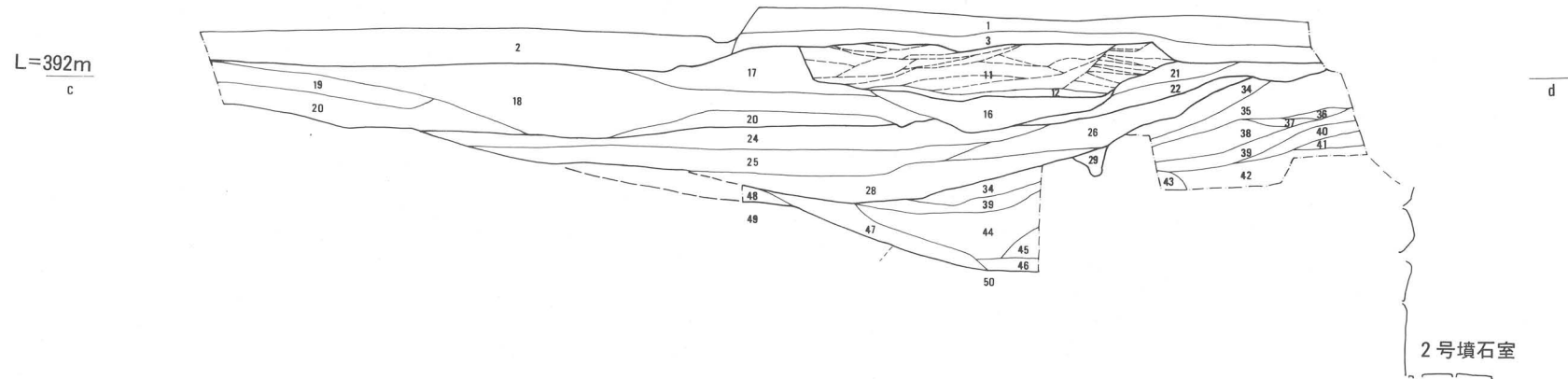
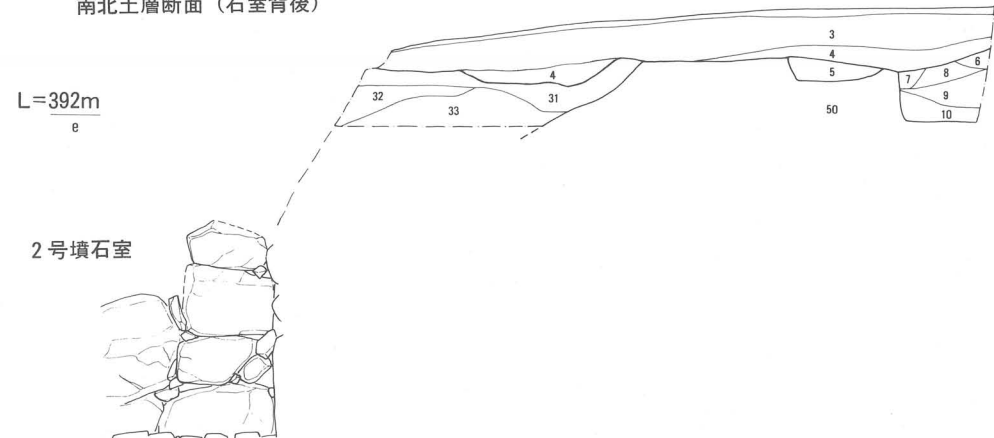


図15 大貝ラマエジリ2号墳土層断面図(1)

東西土層断面 (東半)

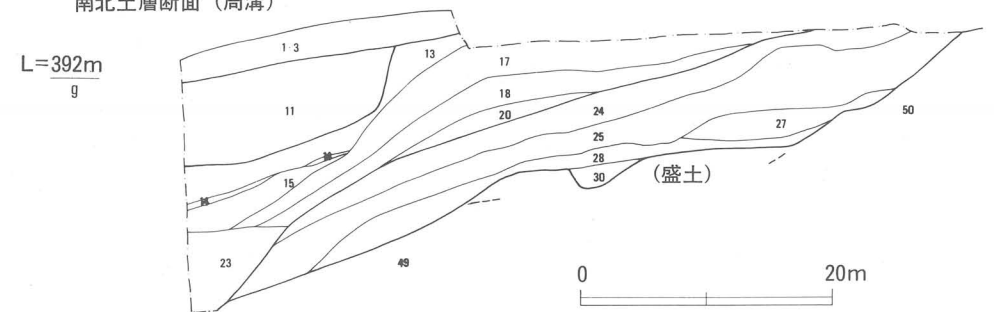


南北土層断面 (石室背後)



- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1. 腐植土              | 18. 淡茶色砂質土           |
| 2. 耕作土              | 19. 暗茶色砂質土           |
| 3. 茶褐色土 (旧耕作土)      | 20. 淡褐色砂質土           |
| 4. 淡茶色砂質土           | 21. 淡茶褐色粘質土          |
| 5. 淡黄茶色砂質土 (土坑 204) | 22. 淡黄褐色土 (やや粘質)     |
| 6. 黄灰色砂質土           | 23. 淡黄茶色土 (やわらかい)    |
| 7. 橙灰色砂質土           | 24. 淡黒褐色粘質土          |
| 8. 淡茶色砂質土 (やや灰色)    | 25. 黒褐色粘質土           |
| 9. 淡橙茶色砂質土          | 26. 暗茶褐色土 (やや粘質)     |
| 10. 灰色土 (やや粘質)      | 27. 淡黒褐色粘質土 (やや黄色)   |
| 11. 黄茶色砂質土          | 28. 暗黄褐色粘質土          |
| 12. 暗灰褐色粘質土         | 29. 黒褐色粘質土           |
| 13. 茶橙色土 (やや粘質)     | 30. 暗黄褐色粘質土          |
| 14. 暗灰褐色粘質土         | 31. 黄橙色砂質土 (やや茶色)    |
| 15. 淡茶色砂質土 (やや灰色)   | 32. 灰黄色砂質土 (黒色粘質土含む) |
| 16. 茶色砂質土 (やや灰色)    | 33. 黄灰色砂質土 (黒色粘質土含む) |
| 17. 茶色砂質土           | 34. 淡灰褐色土 (やや粘質)     |

南北土層断面 (周溝)



- |                       |
|-----------------------|
| 35. 橙茶色粘質土 (やや褐色)     |
| 36. 橙茶色粘質土            |
| 37. 橙灰色粘質土            |
| 38. 橙茶色土 (やや砂質)       |
| 39. 黒褐色土 + 橙茶色砂質土     |
| 40. 黒色粘質土             |
| 41. 淡茶色砂              |
| 42. 橙黄色粘質土            |
| 43. 橙茶色粘質土            |
| 44. 暗黄茶色粘質土 (黒色粘質土含む) |
| 45. 茶灰色粘質土 (黒色粘質土含む)  |
| 46. 灰茶色粘質土 (黒色粘質土含む)  |
| 47. 黒灰色粘質土            |
| 48. 暗灰色粘質土            |
| 49. 黄茶色粘質土 (地山)       |
| 50. 風化花崗岩類 (地山)       |

図16 大貝ヲマエジリ 2号墳土層断面図(2)



図17 大貝ヲマエジリ2号墳周溝平面図

## 4 ま と め

今回は、大貝ヲマエジリ2号墳の東半を中心に発掘調査を実施し、いくつかの新しい知見を得ることができた。

2号墳の築造にあたっては、まず、尾根南斜面において南北長15m以上、東西幅35m以上の掘り込み作業を行っている。第1次調査の際、この掘り込み坑内に幅7m程度の墓壙を推定していたが、今回の発掘調査の結果、墓壙は掘り込み坑の西寄りにその西半部のみを形成していることが明らかとなった。なお、横穴式石室が保存されることとなったため、墓壙を全体にわたっては検出していない。また、当初、周溝は残存していないと考えていたが、古墳の東側においてこれを確認することができた。周溝埋土の上層から中世土器（土師器、瓦器）片が若干出土したのみで、古墳に伴う遺物は認められない。瓦器片は細片のため詳細な時期を明らかにできないが、先述の瓦器碗と類似しており、周溝埋没の最終時期の一端を捉えることができよう。残存墳丘および周溝等から径13～14m、石室床面からの高さ約5mのややいびつな半円状の円墳と推定される。

平坦面上からは、第1次調査と同様、中世以降の遺構・遺物を検出しているが、図示し得たものは多くない。整地土内から出土した瓦器碗（図13-1）は川越編年のⅢ段階AないしB型式に比定され、12世紀後葉から13世紀中葉の年代が与えられている。平坦面では8基の土坑と4基のピットを検出しているが、耕作による削平のためか明確な建物遺構の状況を確認するまでには至っていない。また、土坑203・205、ピット1からは土師器、瓦器、陶器等が出土しているものの細片が多く、その時期等を確定できない。数少ない遺物からではあるが、2号墳上面の遺構群は13世紀中葉頃から17世紀の範疇で捉えることができる。

大貝古墳群が位置する尾根が町道によって東西に分断され、小字名によって上方を大貝ヲマエジリ支群、下方を大貝東谷支群としているが、本来は一連のグループとして捉えられるものである。周辺尾根の踏査を重ねたところ、さらに古墳の数は増加したものの、現状では横穴式石室を主体とする支群は認められず、そのほとんどが木棺直葬墳であると推定される。木棺直葬墳によって構成されている野山古墳群、沢古墳群の調査成果からこれらの築造年代は、5世紀後葉から6世紀後葉の時期で捉えうるものと考えられる。そして、6世紀後葉以降、大貝古墳群での造墓活動が開始されている。大貝古墳群内での詳細な築造順序は、まだ推定の域を脱しないが、尾根先端部の大貝東谷6号墳に始まり、順次、上方へと移って行ったものと考えられる。なお、大貝出土とも伝えられる須恵器3点（脚付短頸壺、高杯、甗）と土師器（高杯）を確認しており、これらは5世紀後葉と6世紀後葉に比定できるものである。大貝古墳群出土のものであれば、その一時期をおさえることのできる好資料となるものであり、別稿での資料報告を予定しているところである。

## 抄 録

遺 跡 名	おおがい 大貝古墳群（大貝ヲマエヅリ 2 号墳ほか）
調 査 地	うだ はいばら 奈良県宇陀郡榛原町大字大貝520、345、463、464、498番地（小字名 ヲマ エヅリ、東谷）
遺 跡 立 地	標高370～400mの尾根上
遺 跡 規 模	範囲：南北250m×東西30～70m 面積：約8000㎡
種 別	古墳、中世～近世の遺物散布地
事 業 名	榛原町内遺跡発掘調査事業（平成2年度 国庫・県費補助事業）
調 査 名	大貝古墳群第2次発掘調査事業
調 査 主 体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、調査担当者 柳沢一宏）
調 査 原 因	個人による農地造成工事
現 地 調 査 期 間	1990年7月26日～1991年3月20日
発 掘 調 査 面 積	約80㎡
検 出 遺 構	古墳周溝、土坑、ピット
検 出 遺 物	土師器、瓦器、陶磁器、鉄釘など
遺物・資料の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

## IV 沢遺跡第3次発掘調査概要

### 1 調査の契機と経過

#### (1) 調査史抄

沢遺跡は奈良県宇陀郡榛原町大字沢に広がっており、現状は大半が畑地、一部が宅地や道路となっている。この遺跡は1955年（昭和30年）、沢集落内の町道拡幅工事に伴って地下約0.5～0.7mの包含層から多くの遺物が出土したことによってその存在が知られるようになった。その後、1963年（昭和38年）には遺跡北端の畑地から水田へと下る畦畔で縄文時代後期前葉の深鉢が出土し、同年8月に網干善教・小泉俊夫氏らによってこの畑地の発掘調査が行われ、長さ7m、幅2mのトレンチが東西・南北のL字状に設定されている。基本層序は第1層が耕作土（約0.3m）、第2層が褐色粘土層（約0.5～0.7m）、第3層が弥生土器や石包丁を含む砂利層（0.2～0.3m）、縄文土器を含む黒色粘土層（0.2～0.3m）、第4層は無遺物の黄白色砂利層となっている。この時の遺物出土状況等から遺跡の中心は、調査地よりも東南にあると考えられている。

1987年（昭和62年）には、農水省の農地開拓事業にともなって沢遺跡の東方と西方の2箇所にトレンチが設定されているが、弥生時代後期～中世の土器片が少量出土したのみで、明確な遺構は認められなかったようである。

沢遺跡の発掘調査を今後も実施する可能性もあることから、便宜上、1963年（昭和38年）の調査を第1次調査、1987年（昭和62年）の調査を第2次調査、今回の調査を第3次調査と呼称し、整理していきたい。

#### 参考文献

岡崎晋明ほか『大和考古資料目録』第14集 奈良県立橿原考古学研究所 1987

楠元哲夫ほか「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報』1988年度 奈良県立橿原考古学研究所1989

#### (2) 調査の契機と経過

先述の沢遺跡内において個人住宅の改築が1991年3月に行われることが明らかとなったため、所有者に発掘調査が必要な旨を連絡し、埋蔵文化財発掘届出書の提出を求めた。その後、同届出書が提出され、早急に関係機関等が遺跡の取り扱い、調査の実施方法等について協議を行ったところ、平成2年度国庫・県費補助事業として榛原町教育委員会が発掘調査を実施することとなった。現地調査は1991年2月14日から1991年2月27日にかけて実施し、うち実働は6.5日である。

なお、調査関係者は次のとおりである。

調 査 主 体 榛原町教育委員会

調 査 担 当 課 榛原町教育委員会 社会教育課



調査担当者 榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳沢一宏  
調査補助員 井上好美、森塚和彦、山本美恵子  
調査作業員 太田政信、小西正直、小西ヨシ子、坂本貞子、山口基嵯子、池田圭子、  
小林幸代、棚田幸子  
調査指導 奈良県教育委員会  
航空写真撮影 株式会社岡本組、株式会社パスコ  
調査協力 沢自治会、小泉俊夫

### (3) 現地調査日誌抄

1991年(平成3年)

2月14日(木)

器材搬入。標高(BM)設置。調査前写真撮影。

2月15日(金)

南北方向のトレンチ(6×2m)を設定し、掘り下げを開始。第1層の整地上から中世土器片、現代の瓦片が出土。

2月16日(土)

第1層掘り下げ。

2月19日(火)

第2～3層掘り下げ。第2層上面遺構写真撮影・実測。

2月20日(水)

第2～4層掘り下げ。第3層上面遺構写真撮影。土層断面写真撮影。

2月22日(金)

土層断面図作成。調査地周辺の平板測量。

2月27日(水)

航空写真撮影。トレンチ埋め戻し作業。器材搬出。



写真11 作業風景

## 2 位置と環境

沢遺跡は芳野川東岸の標高331.5～335.5mの台地状の畑地に位置し、現在の芳野川からは約150～300mの距離を測る。遺跡の北方、南方、西方の三方は芳野川に灌ぐ小支流である谷川や芳野川の氾濫原となっている。地形および遺物の散布状況から遺跡の範囲を推察すれば、氾濫原より約1～2m高くなっている畑地が中心となってくる。遺跡の東方には沢城跡から南西にのびる丘陵先端部がひかえ、この山裾までが遺跡の範囲と考えられる(図18)。

沢谷川を挟んで南約200mの尾根上には弥生時代後期の住居跡や古墳時代中期末～後期初頭の古墳、中世の建物遺構(寺院跡?)、などが確認されている沢南遺跡、沢谷川を約400m東方に遡れば縄文後期～弥生時代前期、中世の遺物が出土している下城・馬場遺跡、さらに遡れば古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群など遺跡が集中している地域でもある。

## 3 遺跡の調査

今回の調査地は遺跡の中心よりやや東寄りの山裾にほど近い宅地内の一部である。住宅の改築地内に南北約6m、東西約2mのトレンチを設定したのみで僅かな調査範囲となっている(図19)。

### 基本層序(図20)

基本層序は第1層が茶褐色土、第2層が淡褐色土、第3層が淡茶色粘質土、第4層が褐灰色砂質土、第5層が暗灰色砂質土、第6層が細かい灰色土となっている。第1層からは土師器、瓦器、陶磁器、瓦質土器等の各破片とともに現代の瓦片が出土しており、建物建設前(1930年頃?)の整地土層である。第2層も第1層と類似し中世～近世の土器片が出土している。第3層からは土師器、磁器、第4層からは土師器の破片が若干出土している。第5層以下は、遺物の出土が認められないため、深さ約2.1mで掘り下げ作業を止めている。

### 遺 構(図21)

遺構は第2層上面で2基のピット、第3層上面で1基のピットを検出しており、前者が径10～12cm、深さ9～14cm、後者が径22cm、深さ26cmを測る。第2層上面遺構は近代～現代、第3層上面遺構は近代のものと考えられるが、調査範囲が限られていたため、その全容を明らかにできない。

### 出土遺物(図22)

出土遺物および周辺での採集遺物は、コンテナ整理箱に1箱となっているが細片が多く、図化し得たものは僅かである。出土遺物の種類は先述のとおりであるが、周辺での採集遺物は中世土器のほか、サヌカイト片を若干含んでいる。

### 瓦器 椀(1・2)

いずれも底部片である。1の高台は外傾状に張り付けられたやや厚みのもので、復元径5.2cmを測る。底部内面には連結輪状暗文が認められる。2は底い逆三角形を呈する張り付け高台であるが、

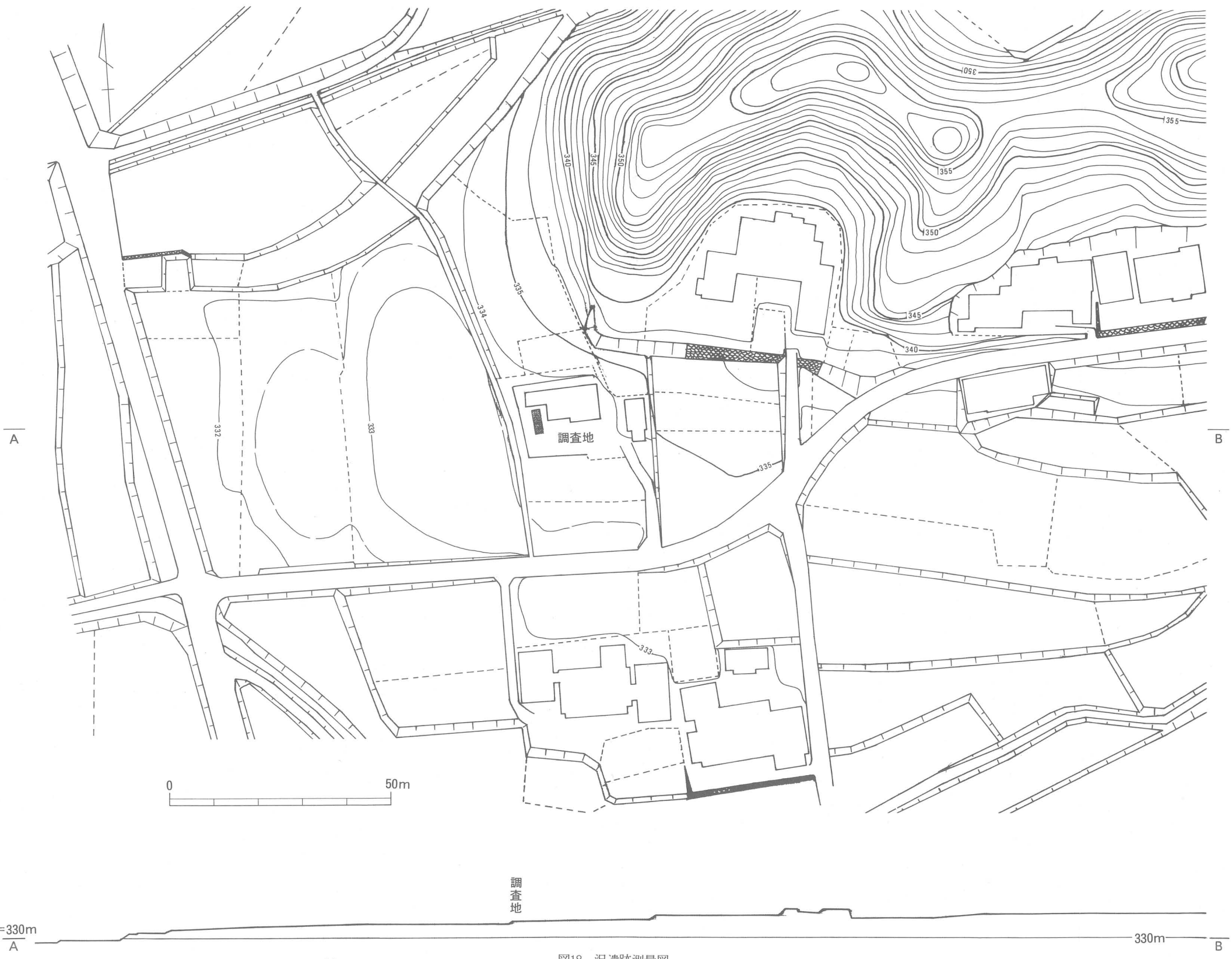


図18 沢遺跡測量図

細片のため、その径を復元できない底部内面には僅かはあるが、渦巻き状の暗文が認められる。

土師器 皿（3）

復元口径11.4cm、器高2.2cmを測る中形の皿で、胎土は灰白色系に属するものである。口縁部はやや内彎気味に外上方に立ち上がり、底部は中央がやや窪む。

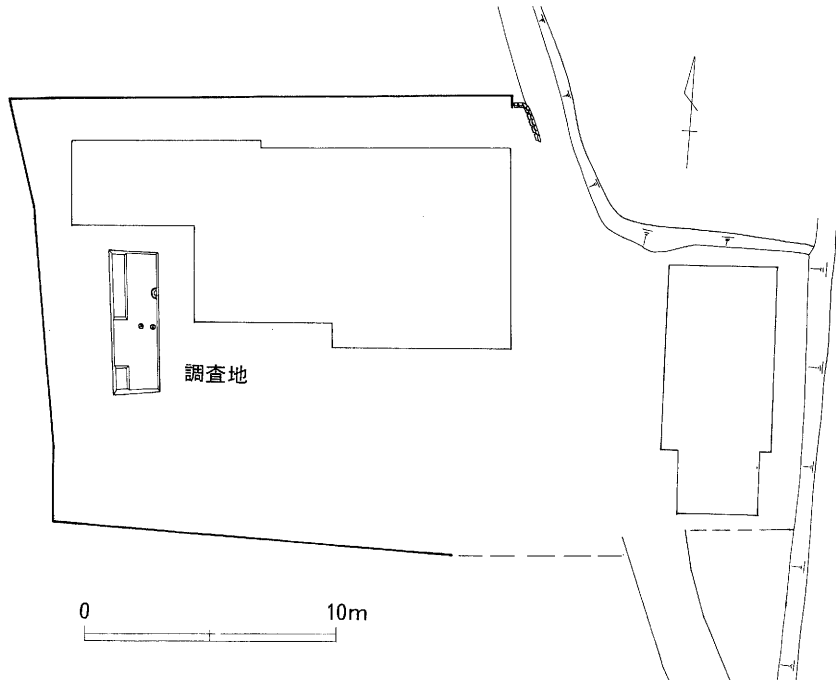


図19 沢遺跡第3次調査地平面図

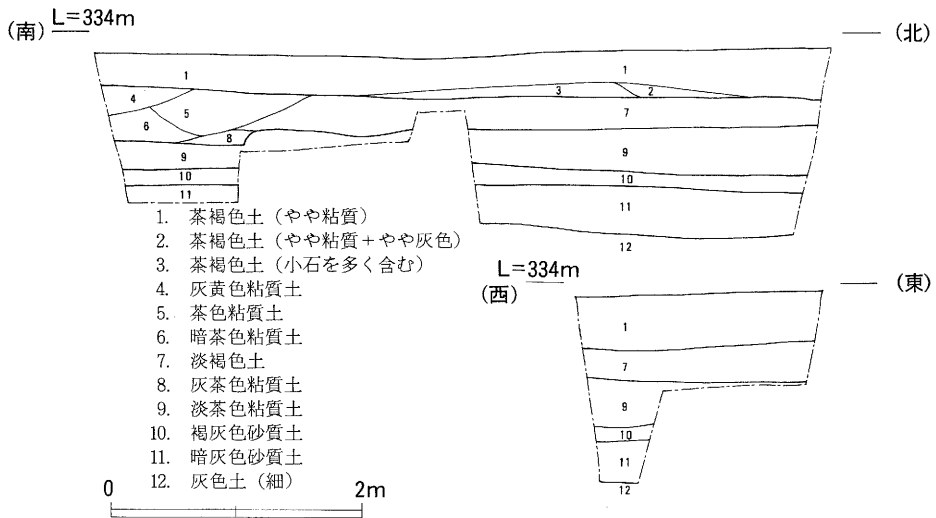
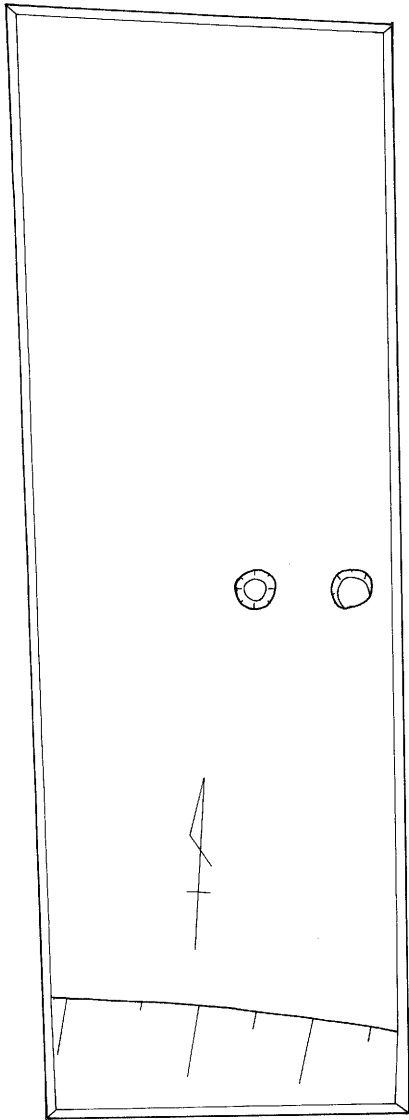


図20 沢遺跡第3次調査土層断面図

第2層上面遺構



第3層上面遺構

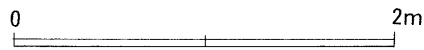
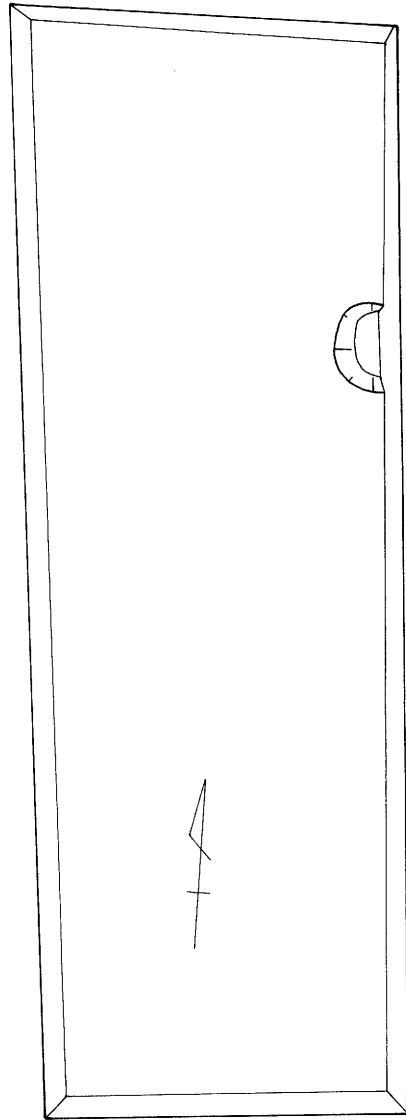


图21 沢遺跡第3次調査遺構平面图

## 4 ま と め

沢遺跡からはこれまでに縄文時代中期末葉から縄文時代晩期、弥生時代前期から後期の土器が出土しており、このなかでも縄文時代後期前葉、弥生時代中期（第Ⅲ様式）から弥生時代後期（第Ⅴ様式）の土器が多く確認されている。明確な遺構は検出されていないが、この頃に盛期を迎える芳野川流域の主要集落のひとつと考えられる。今回の発掘調査では、この時期の遺構・遺物を検出できず、縄文時代～弥生時代の遺構は山裾周辺にまで及んでいないと考えられる。縄文・弥生時代の遺物は遺跡西端の道路から東方50～60mをはかる標高332～333.5mまでの畑地で多く散布しており、この周辺がこの時期の遺跡の範囲と推定できる（図23）。なお、第1次調査を担当された小泉俊夫氏は西端の道路から東方約30m（標高332～332.5m）付近までが遺跡（集落）の中心と考えられている。また、第3次調査地の南約30～40m付近でも多くの土器が出土しており、今後とも注意していかなければならない地点と考えられている。

今回の発掘調査で須恵器片が若干出土し、またその破片が周辺にも散布しているものの、古墳時代の詳細な様相は現段階では明らかにし得ない。一方、瓦器、土師器等の中世土器が僅かながら出土していることから、中世には台地のほぼ全域、山裾部分までその範囲が広がっていると考えられる。背後には、沢城跡や居館跡である下城・馬場遺跡がひかえており、沢遺跡にもこれらの関連施設が存在した可能性が十分に考えられる。図22-1の瓦器は川越編年の第Ⅱ段階B型式に属し、12世紀中葉～後葉の年代が与えられる。図22-2の瓦器は第Ⅲ段階D型式、13世紀後葉～末葉に属すると考えられる。図22-3の土師器はこれらよりやや時期が下降する16世紀後葉～17世紀前葉と思われる。

沢遺跡は縄文時代中期以降、現代に至るまで生活の営みが継続しているが、必ずしもその全容が明らかになっているとはいえない。このためには、まず、この遺跡の基本的な確認調査を実施し、周辺遺跡との関係をさらに考慮しつつ、この遺跡の占める位置を明確にしていかなければならないと考えている。

参考文献 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』 1983年

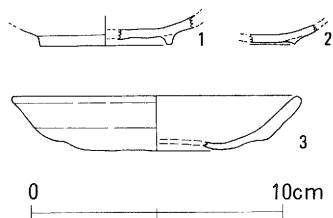


図22 沢遺跡第3次調査出土遺物実測図

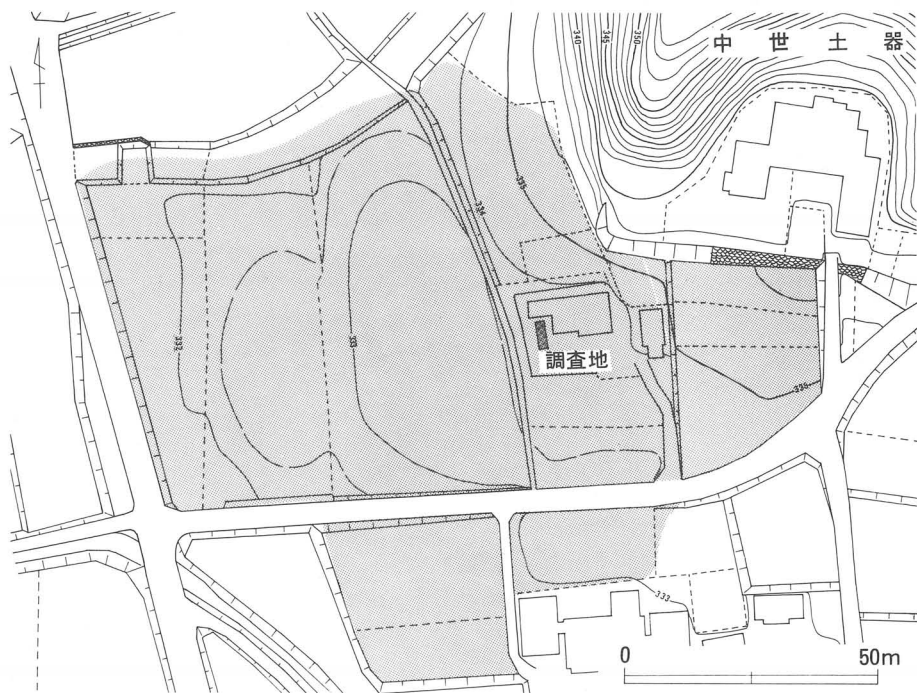
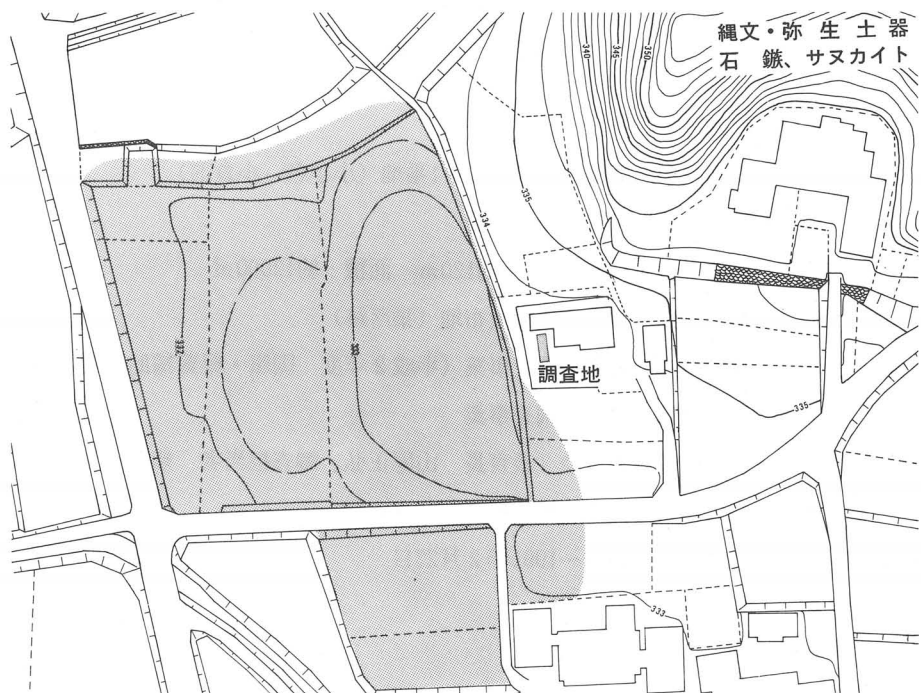


図23 沢遺跡遺物散布範囲図



## 抄 録

遺 跡 名	沢遺跡 <sup>さわ</sup>
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町沢1413-1番地（小字名 小倉前）
遺 跡 立 地	尾根先端の河岸段丘状台地
遺 跡 規 模	範囲：南北110m×東西約120m 面積：約12000㎡
種 別	縄文時代～中世の遺物散布地（集落跡）
事 業 名	榛原町内遺跡発掘調査事業（平成2年度 国庫・県費補助事業）
調 査 名	沢遺跡第3次発掘調査事業
調 査 主 体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、調査担当者 柳沢一宏）
調 査 原 因	個人による住宅改築工事
現 地 調 査 期 間	1991年2月14日～1991年2月27日
発 掘 調 査 面 積	約12㎡
検 出 遺 構	ピット
検 出 遺 物	サヌカイト、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器など
遺物・資料の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

## 付載 1 大貝ヲマエジリ 1号墳・2号墳の石材について

刑部小学校 奥田 尚

ヲマエジリ 1・2号墳に使用されている石材の石種を裸眼で同定した。

1号墳には石室材の一部が残存し、石種は細粒黒雲母花崗岩、流紋岩質溶結凝灰岩Aを主とし、中粒黒雲母花崗岩、閃緑岩、流紋岩質溶結凝灰岩B、片麻状黒雲母花崗岩、変斑礫岩、変輝緑岩である。2号墳には石室材の一部と床面の敷石の一部が残存し、石室の石種は流紋岩質溶結凝灰岩Aを主とし、細粒黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩、粗粒黒雲母花崗岩、閃緑岩、流紋岩質溶結凝灰岩B、変斑礫岩、変輝緑岩で、床面の敷石の石種は変輝緑岩、流紋岩質溶結凝灰岩Aを主とし、細粒黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩、アプライト質黒雲母花崗岩、閃緑岩、流紋岩質溶結凝灰岩B、変斑礫岩である。1号墳と2号墳の石室材を比較すれば、ほぼ同じような石種の石材が使用されている。

各石種の特徴について述べる。

細粒黒雲母花崗岩：色は灰色で、鉱物粒は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5～1.5mm、量が多。長石は白色、粒径が0.5～1mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm、量が多い。

中粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、鉱物粒は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が多い。長石は白色、粒径が2～3mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。

粗粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、鉱物粒が石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、眼球状をなすものがある。粒径が2～20mm、量が多い。長石は白色、粒径が2～8mm、量が多。黒雲母は黒色板状、粒径が1～2mm、量が僅かである。

アプライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色で、鉱物粒が石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2～10mm、量が多い。長石は白色、粒径が2～10mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1～2mm、量がごくごく僅かである。

閃緑岩：色は灰緑色で、鉱物粒は長石、角閃石である。長石は白色、粒径が1～2mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が1～1.5mm、量が多い。稀に、黒色柱状で20mmに及ぶものもある。

流紋岩質溶結凝灰岩A：色は灰白色で、顕著な溶結を示すものもある。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1～5mm、量が多い。複六角錐をなす石英が多い。長石は無色透明、粒径が2～3mm、量が多。黒雲母は黒色板状、六角形で、粒径が1～1.5mm、量が僅かである。基質は白色、ややガラス質である。

流紋岩質溶結凝灰岩B：色は暗灰色～黒色で、顕著な溶結を示す場合がある。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1～4mm、量が多い。複六角錐をなす石英が多い。長石は白色、粒径が1～5mm、量が多。黒雲母は黒色、六角形板状で、粒径が1～2mm、量

が僅かである。基質は黒色ガラス質である。

片麻状黒雲母花崗岩：色は灰色で、黒色部と白色部が縞模様をなす顕著な片麻状を示す。白色部には長石が多く、黒色部には黒雲母が多い。鉱物粒は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明、粒径が0.5～1 mm、量が僅かである。長石は白色、粒径が0.5～6 mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒径が0.5～1 mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が0.5～3 mm、量が僅かである。

変斑礫岩：色は暗灰色で、角閃石の柱状斑晶が目立つ。鉱物粒は長石、角閃石である。長石は白色、粒径が2～3 mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～20mm、量が多い。粒状のものは2～3 mmのものが多く、5～20mmのものは柱状である。

変輝緑岩：色は暗灰色、鉱物粒は長石、角閃石である。長石は白色、粒径が1～1.5mm、量が多い。角閃石は黒色粒状で、粒径が0.5～1 mm、量が多い。

1号墳が構築されている場所の地山は細粒の変輝緑岩からなり、この下位や2号墳が構築されている場所にかけては粗粒で、やや片麻状を示す黒雲母花崗岩である。岩相変化が著しい。地山の岩石は著しい風化を受け、媒乱砂となり、石材を得がたい。当地の北方には伊那佐山があり、山腹から頂上にかけては室生火山岩が分布する。白色や黒色の流紋岩質溶結凝灰岩を主とする。

古墳造営場所では石材を得ることができないため、他地から石材が運ばれたと考えられる。流紋岩質溶結凝灰岩A・Bは岩相的に室生火山岩の岩相の一部に酷似することから、近地点では北方の伊那佐山から南へ延びる谷で採取できる。粗粒黒雲母花崗岩、アブライト質黒雲母花崗岩・変輝緑岩は地山の石種と同じであることから、近くの谷川等で採石されたと推定される。また、他の石種については採石地を推定しがたいが、当古墳北方の谷で得ることができる可能性もある。

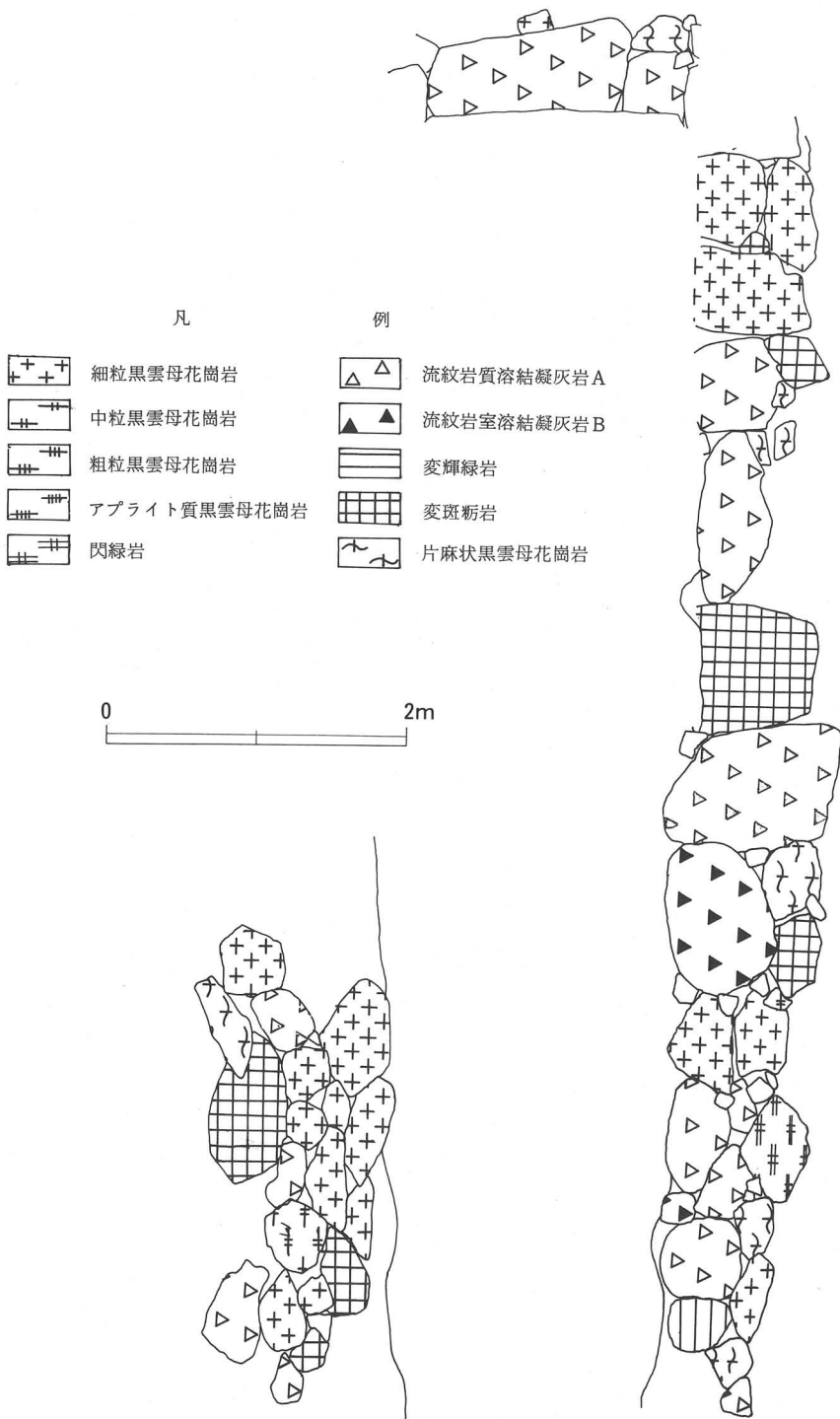


図24 大貝ラマエジリ1号墳石材の岩石種

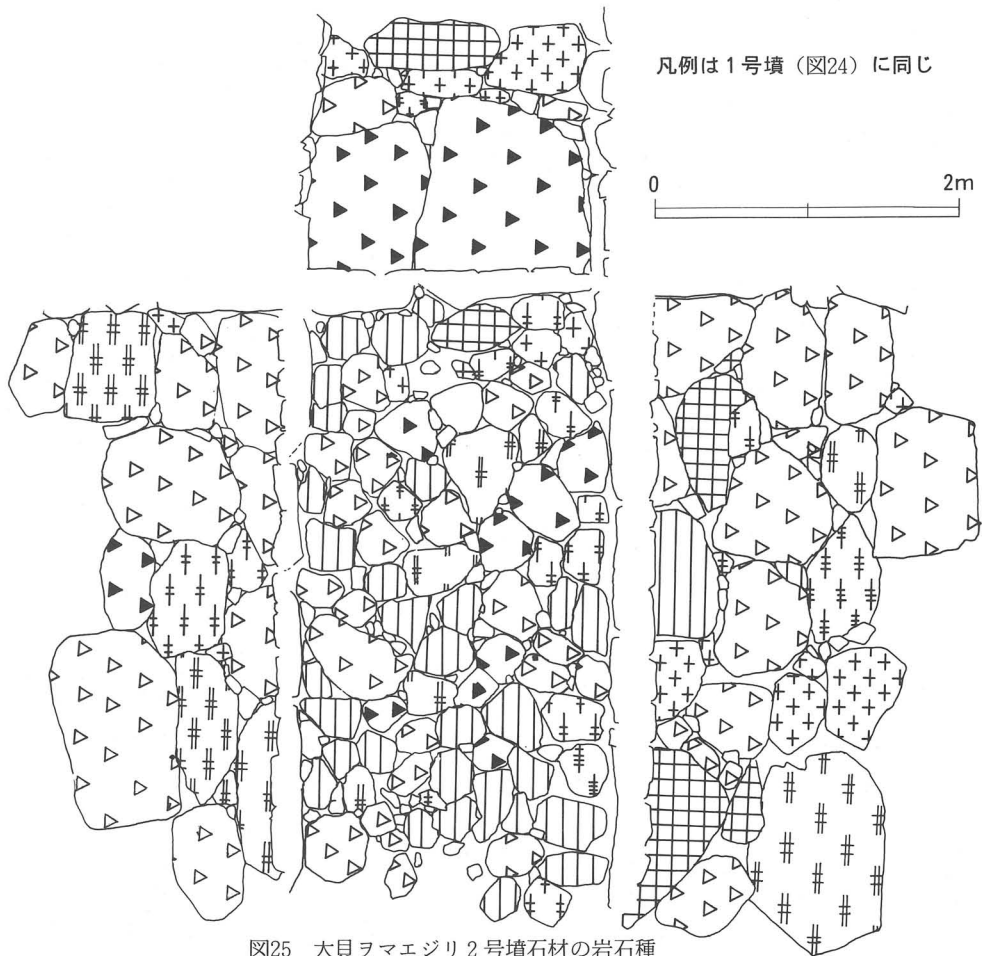


図25 大貝ヲマエヅリ2号墳石材の岩石種

表3 大貝ヲマエヅリ1号墳の石種と礫径

壁面	石種	礫径 (cm)			合 計
		10 ≤ < 50	50 ≤ < 100	100 ≤ < 150	
東 壁	中粒黒雲母花崗岩	2			2
	細粒黒雲母花崗岩		5		5
	閃 緑 岩		1		1
	流紋岩質溶結凝灰岩A	2	4	2	8
	流紋岩質溶結凝灰岩B	1		1	2
	片麻状黒雲母花崗岩	6	1		7
	変 斑 礫 岩	2	3	1	6
	変 輝 緑 岩	1			1
奥 壁	細粒黒雲母花崗岩	1			1
	流紋岩質溶結凝灰岩A		1	1	2
	片麻状黒雲母花崗岩	1			1
西 壁	中粒黒雲母花崗岩	1			1
	細粒黒雲母花崗岩	6	5		11
	流紋岩質溶結凝灰岩A	3	1		4
	片麻状黒雲母花崗岩		1		1
	変 斑 礫 岩	1	1		2

表4 大貝ヲマエヅリ2号墳の石種と礫径

場所	石種	礫径 (cm)			合 計
		10 ≤ < 50	50 ≤ < 100	100 ≤ < 150	
東 壁	細粒黒雲母花崗岩	4	3		7
	中粒黒雲母花崗岩		1		1
	粗粒黒雲母花崗岩		1		1
	閃 緑 岩		1	1	2
	流紋岩質溶結凝灰岩 A	4	8	1	13
	流紋岩質溶結凝灰岩 B	1			1
	変 斑 礫 岩	1	2	1	4
	変 輝 緑 岩	1	1		2
奥 壁	細粒黒雲母花崗岩	2	2		4
	中粒黒雲母花崗岩	1			1
	流紋岩質溶結凝灰岩 A	2	1		3
	流紋岩質溶結凝灰岩 B			2	2
	変 斑 礫 岩		1		1
西 壁	細粒黒雲母花崗岩	2			2
	中粒黒雲母花崗岩	1	1		2
	閃 緑 岩	1	1	1	3
	流紋岩質溶結凝灰岩 A	3	7	1	11
	流紋岩質溶結凝灰岩 B		1		1
敷 石	細粒黒雲母花崗岩	3			3
	中粒黒雲母花崗岩	11			11
	アプライト質黒雲母花崗岩	1			1
	閃 緑 岩	4	1		5
	流紋岩質溶結凝灰岩 A	21	2		23
	流紋岩質溶結凝灰岩 B	8	2		10
	変 斑 礫 岩	1	1		2
	変 輝 緑 岩	31			31

表5 大貝ヲマエヅリ1・2号墳の石種と礫径比較

古墳名 石種 礫径 (cm)	1号墳				2号墳			
	10 ≤ < 50	50 ≤ < 100	100 ≤ < 150	合 計	10 ≤ < 50	50 ≤ < 100	100 ≤ < 150	合 計
細粒黒雲母花崗岩	7	10		17	11	5		16
中粒黒雲母花崗岩	3			3	13	2		15
粗粒黒雲母花崗岩						1		1
アプライト質黒雲母花崗岩					1			1
閃 緑 岩		1		1	5	3	2	10
流紋岩質溶結凝灰岩 A	5	6	3	14	30	18	2	50
流紋岩質溶結凝灰岩 B	1		1	2	9	3	2	14
片麻状黒雲母花崗岩	7	2		9				
変 斑 礫 岩	3	4	1	8	2	4	1	7
変 輝 緑 岩	1			1	32	1		33
合 計	27	23	5	55	103	37	7	147

## 付載 2 榛原町大貝ヲマエジリ 1 号墳の赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田 博幸 森 眞由美

奈良県宇陀郡榛原町大字大貝に所在する大貝古墳群は、榛原町教育委員会の調査により、7基の古墳と1基の古墳状隆起で構成されていることが明らかにされた。1989年～1990年の調査においては、そのなかの大貝ヲマエジリ1号墳の遺構ならびに遺物に赤色顔料物質が観察された。今回、それらの赤色顔料について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法<sup>1)</sup>とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、知見を得たので報告する。

### 試料の外観および分析試料の採取

試料 1 大貝ヲマエジリ 1 号墳の出土遺物No.16の須恵器坏身の外底部に付着している赤色顔料の混在する土壌。その最も赤いと思われる部分10mgを採取して分析用試料とする。

試料 2 大貝ヲマエジリ 1 号墳の出土遺物No.19の銅環の下および周辺の、赤色顔料を含むとみられる土壌 200 g。その最も赤味を帯びた部分10mgを選別採取して分析用試料とする。

試料 3 大貝ヲマエジリ 1 号墳の出土遺物No.29の須恵器坏蓋の頂部に付着の赤色顔料を含むと見られる隣接土壌 10 g。その最も赤味を帯びた部分10mgを分析用試料とする。

試料 4 大貝ヲマエジリ 1 号墳の出土遺物No.30の須恵器坏蓋の頂部に付着の赤色顔料を含むと見られる隣接土壌 5 g。その最も赤いと思われる部分10mgを分析用試料とする。

試料 5 大貝ヲマエジリ 1 号墳の玄室奥壁付近で検出された頭骨下の赤色顔料を含むと思われる土壌 60 g。その最も赤味を帯びた部分10mgを選別採取して分析用試料とする。

### 試料検液の作製

上記の採取試料のそれぞれをガラス尖形管に移し、濃硝酸 1 滴と濃塩酸 3 滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は、試料番号にそれぞれ対応させる。

### ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51B (2 cm×40cm) を使用し、ブタノール硝酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン ( $\text{Fe}^{3+}$ ) と水銀イオン ( $\text{Hg}^{2+}$ ) の標準液を、同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェルニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色ス

ポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液、ならびに、対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表6、表7のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（ $\text{Hg}^{2+}$ は紫色、 $\text{Fe}^{3+}$ は紫褐色のスポットとして検出される。）

表6 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf値（色調）
試料検液 1	0.13（紫褐色）
試料検液 2	0.13（紫褐色） 0.83（紫色）
試料検液 3	0.15（紫褐色）
試料検液 4	0.14（紫褐色）
試料検液 5	0.13（紫褐色） 0.84（紫色）
$\text{Fe}^{3+}$ 標準液	0.15（紫褐色）
$\text{Hg}^{2+}$ 標準液	0.84（紫色）

- (2) ジチゾンによる検出：（ $\text{Hg}^{2+}$ は澄色スポットとして検出され、 $\text{Fe}^{3+}$ は反応陰性のため呈色せず。）

表7 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf値（色調）
試料検液 1	呈色スポット発現せず
試料検液 2	0.84（橙色）
試料検液 3	呈色スポット発現せず
試料検液 4	呈色スポット発現せず
試料検液 5	0.84（橙色）
$\text{Fe}^{3+}$ 標準液	呈色スポット発現せず
$\text{Hg}^{2+}$ 標準液	0.84（橙色）

## 判定

上記の結果の通り、大貝古墳群のヲマエジリ1号墳より出土の遺物にかかわる赤色顔料試料では、玄室奥壁付近で発見された、頭骨および銅環下の土壤中からは $\text{Hg}^{2+}$ が検出されたので、この部位に辰砂に由来する水銀朱（ $\text{HgS}$ ）が存在したことが確認された。他の試料、すなわち、須恵器坏蓋ならびに坏身に身出された赤色顔料からは $\text{Fe}^{3+}$ のみしか検出されなかったことから、それらに塗布あるいは使用された赤色顔料はベンガラ（酸化鉄  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）であったと判定される。

以上のように、今回の分析によって、6世紀後半の築造・埋葬と考えられるヲマエジリ1号墳に



において、遺体頭部に水銀朱、器物にベンガラ系赤色顔料を使用した埋葬儀礼の一端が明らかになった。このことは、同時代の畿内の主要古墳の埋葬儀礼における、赤色顔料の使用実態の変遷を解明していくうえにも、有用にして興味ある知見を提供することになると考える。

(1991年1月分析)

〔註〕

- 1) 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斎藤 忠編集 日本考古学論集1 考古学の基本的諸問題』吉川弘文館 pp. 389-407 (1986)

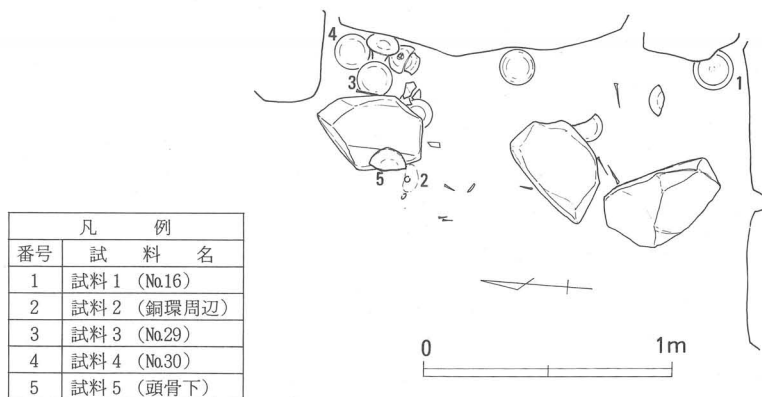


図26 大貝ヲマエヅリ1号墳奥壁付近遺物出土状況平面図

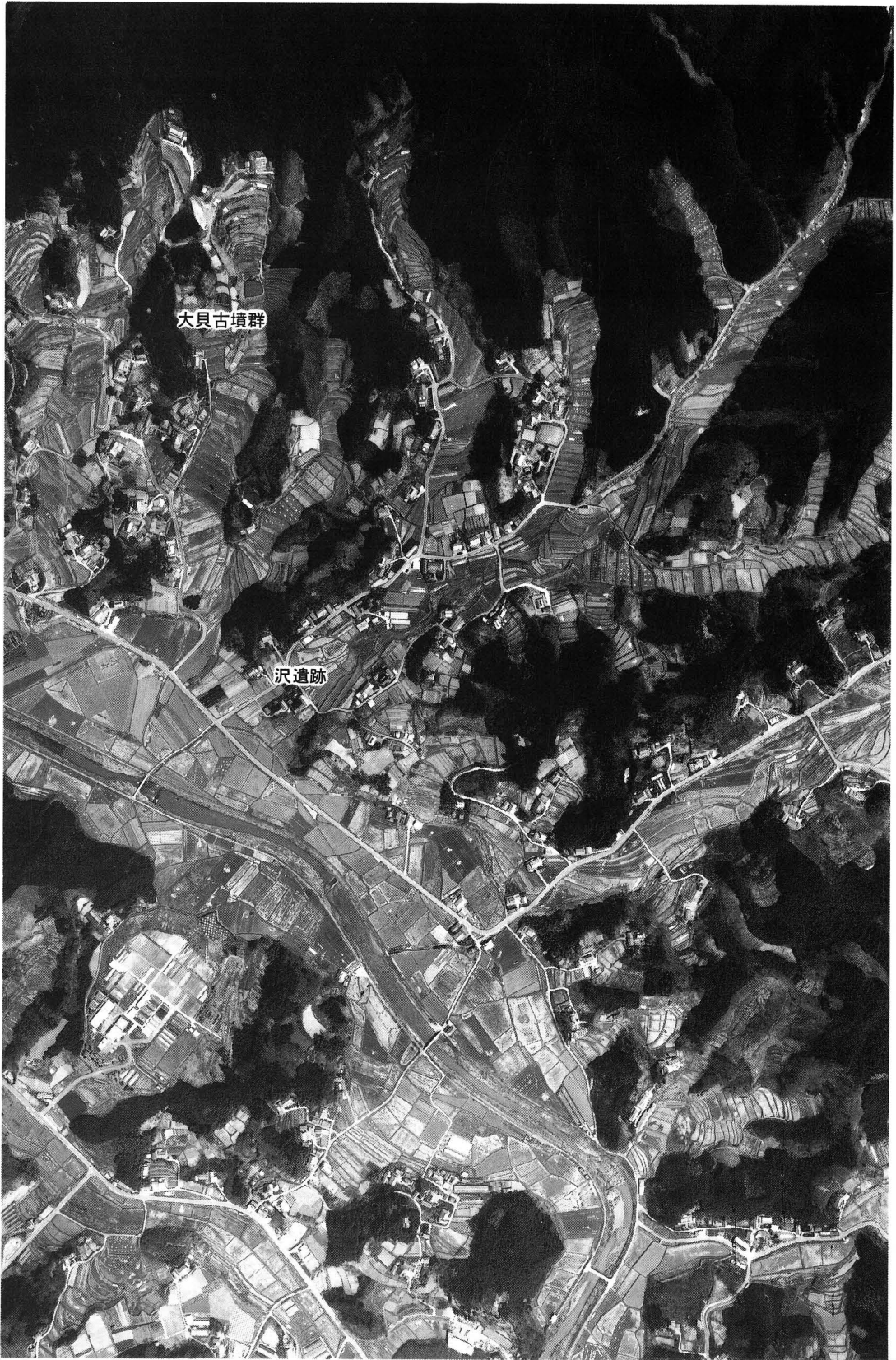


写真12 大貝ヲマエヅリ1号墳奥壁付近遺物出土状況

## あとがき

1989年度から継続してきた大貝古墳群、沢遺跡の第3次発掘調査に際し、地元関係者の方々をはじめ、各関係機関・関係者等のご指導・ご協力を得て終了することができました。安田博幸先生、奥田 尚先生には、お忙しいなか赤色顔料の分析、石材の同定をお願いし、玉稿をいただきました。土地所有者の山本喜清氏には終始、ご協力をいただき、大貝ヲマエジリ2号墳の横穴式石室を保存することができました。文末ではありますが、関係各位のご協力等に対し、感謝するとともに厚くお礼を申し上げます。

# 版 图



航空写真（1981年撮影）





航空写真（1981年撮影）



航空写真



2号墳横穴式石室（南西から）



2号墳東半 調査前（南東から）



2号墳東半 調査前（北西から）





2号墳上面遺構（南東から）



2号墳上面遺構（南東から）



土坑 201 (北東から)



土坑 202・203・204 (南東から)



土坑 205 (北東から)



土坑 206 (北西から)



土坑 207 (南西から)



土坑 208 (南東から)



2号墳全景（北から）



2号墳全景（北西から）



2号墳周溝全景（南東から）



2号墳周溝全景（北西から）



2号墳周溝土層断面（東から）



2号墳墳丘土層断面（東から）



2号墳南北土層断面（南東から）



2号墳横穴式石室北側土層断面（東から）





東谷1号墳（南西から）



東谷2号墳（北東から）



東谷 2号墳 (南西から)



東谷 3号墳 (北東から)



東谷4号墳（北東から）



東谷4号墳横穴式石室（南西から）



東谷 5 号古墳状隆起（南東から）



東谷 6 号墳（北から）

